平成19年度
平成20年度
平成21年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

五反田地区　山島新田地区
加茂新田地区　鵜森地区
堀割遺跡　古見道遺跡
西吉津川遺跡　馬越遺跡
荒又遺跡　太田遺跡
舞台遺跡周辺地　陣ヶ峰遺跡
陣ヶ峰北遺跡

2010

新潟県加茂市教育委員会

平成 19 年度
平成 20 年度
平成 21 年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

五反田地区　山島新田地区
加茂新田地区　鵜森地区
堀割遺跡　古見道遺跡
西吉津川遺跡　馬越遺跡
荒又遺跡　太田遺跡
舞台遺跡周辺地　陣ヶ峰遺跡
陣ヶ峰北遺跡

2010

新潟県加茂市教育委員会

序

「北越の小京都」と謳われる我が加茂市には、清流加茂川を中心とした風光明媚な自然環境の中で、約２万年前に遡る旧石器時代から中世に至るまでの遺跡が約 170 程確認されています。加茂川上流の山間部では縄文時代、下流の平野部では平安時代の遺跡が多く存在し、様々な開発に伴い、発掘調査がされています。

本書で報告する信濃川流域の４地区と８遺跡、１遺跡周辺地を対象とした試掘・確認調査は平成19～21年度にかけて行われたものです。私たちはその結果を踏まえ、多くの開発行為と埋蔵文化財包蔵地との調整を行い、その取扱いについて協議を重ねています。

古見道遺跡は水田の区画工事の最中に遺構が確認されましたが、耕作者のご協力の下、急遽調査することができ、17 世紀初め頃の集落跡を確認しました。加茂市内では近世遺跡の調査事例は少なく、貴重な事例となりました。

堀割遺跡、西吉津川遺跡、馬越遺跡、荒又遺跡、太田遺跡はいずれも下条川流域の遺跡ですが、古代～中世の土器が多く出土しました。

本書はこのような小規模な調査のささやかな成果の報告書です。私たちは、貴重な文化財を各地域における祖先の活動を証明する資料として、大切に保存し、後世に伝え、郷土愛を育む責務があると思います。

このたび、確認調査報告書を刊行するにあたって、本書が当地域の学術・研究資料として多くの皆様に活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護思想が深まれば、この上なく幸せであります。

最後に、発掘調査に対して様々なご指導とご協力を頂いた新潟県教育庁文化行政課、並びに発掘調査に参加された地元の方々、地権者及び工事関係者に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成 22 年 11 月

加茂市教育委員会

教育長　井　上　信　二

例　　言

1　本報告書は、平成 19・20・21 年度に新潟県加茂市内の各種開発に伴い実施した 8 遺跡、1 遺跡周辺地、4 地区における試掘・確認調査の記録である。

2　調査は五反田・山島新田・加茂新田・鵜森地区が信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業、堀割遺跡・古見道遺跡が農業基盤整備事業、西吉津川遺跡・馬越遺跡・荒又遺跡・太田遺跡が県営ほ場整備事業吉津川地区、舞台遺跡周辺地・陣ヶ峰遺跡・陣ヶ峰北遺跡が民間開発に伴い実施したものである。

3　試掘・確認調査の経費は、国庫及び県費の補助金交付を受けた。

4　調査は加茂市教育委員会が主体となり実施した。調査体制（平成 19・20・21 年度）は以下の通りである。

調査主体	加茂市教育委員会	教　育　長	井上信二
総　　括		社会教育課長	中滝孝明（平成 21 年 10 月 31 まで）
		社会教育課長	齋藤　淳（平成 21 年 11 月 1 日から）
管　　理		社会教育課参事	相田喜一郎（平成 21 年 3 月 31 日まで）
		社会教育課参事	樋口恒志（平成 21 年 10 月 31 まで）
庶　　務		社会教育課主査	石井美代子
調査担当		社会教育課係長	伊藤秀和
調査補助員		日々雇用職員	鈴木　進（平成 19 年度）・山田　昇
現場作業員	大橋宏二・大野宏治・酒井昭代・坂上勝利・鈴木定二・鈴木秀夫・田浦武浩・高橋栄一・千葉泰行・中川賢一・名古屋悦男・西村冬彦（社団法人加茂市シルバー人材センター会員）		
整理作業員	櫻井恵美子・高橋雅子・前崎朋子		
整理作業協力者	泉田智子		

5　調査記録図面・写真類、出土遺物は一括して加茂市教育委員会が保管している。

6　本書で示す方位は全て真北である。

7　挿図に使用した既存図面については、その出典を記した。

8　本書に掲載した遺物は各遺跡の種別毎に通し番号を付し、本文及び観察表・挿図図面・写真図版の番号はすべて同一としている。

9　写真図版 1、6、11 の空中写真は（株）オリスが平成 3 年 11 月に撮影した縮尺約 1 ／ 12,500 × 83% のものを使用している。

10　引用・参考文献は著者と発行年（西暦）を〔　〕で文中に示し、巻末に一括して掲載している。ただし、第Ⅵ章自然科学分析は引用文献を末尾に記した。

11　本報告書の執筆は、第Ⅵ章については、（株）パリノ・サーヴェイに資料を委託し、同社より原稿を頂いた。その他の執筆と編集は全て伊藤秀和が行った。

12　遺物写真撮影は（株）セビアスに委託した。墨書土器赤外線写真は田中一穂氏が撮影した。

13　挿図、遺構図、遺物図の製図、写真図版の版組み及び全体のデジタル編集･データ化は、（株）セビアスに委託した。

14　須恵器の産地及び古代土器については春日真実氏（新潟県埋蔵文化財調査事業団）、中世の土器については水澤幸一氏（胎内市教育委員会）、近世磁器については安藤正美氏（見附市教育委員会）からご指導・教示を頂いた。

15　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏から多大な御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である（敬称省略・五十音順、機関などは順不同）。

青木良作・安藤正美・池野芳男・小熊博史・尾崎高宏・小野塚隆蔵・春日真実・茂岡明与司・関　正平
田中一穂・田村浩司・立木宏明・鶴巻栄正・水澤幸一・宮田志保・西潟俊明・長谷川昭一
（社）加茂市シルバー人材センター・（株）大東建託・（株）エステートコンサルタント・小柳建設（株）
（株）外山組・（株）堀内組・（株）涌井組・涌井建設工業（株）・（株）渡辺建材・（株）山内組・（株）セビアス
加茂郷土地改良区・加茂市建設課・三条土地改良区・信濃川河川下流工事事務所・新潟県教育庁文化行政課
新潟県三条地域振興局・加茂市文化財調査審議会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1　平成 19 年度事業の概要……1
2　平成 20 年度事業の概要……1
3　平成 21 年度事業の概要……1
4　遺跡の位置と環境……2

第Ⅱ章　信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業関連

1　調査に至る経緯……3
2　五反田地区……4
（1）調査対象地と試掘調査の概要……4　（2）層　序……4
（3）遺構と遺物……4　（4）調査のまとめ……4
3　山島新田・加茂新田地区……6
（1）調査対象地と試掘調査の概要……6　（2）層　序……9
（3）遺構と遺物……9　（4）調査のまとめ……9
4　鵜森地区……9
（1）調査対象地と試掘調査の概要……9　（2）層　序……10
（3）遺構と遺物……10　（4）調査のまとめ……10

第Ⅲ章　農業基盤整備事業関連

1　調査に至る経緯……11
2　堀割遺跡……11
（1）遺跡と確認立会い調査の概要……11　（2）出土遺物……12
（3）調査のまとめ……12
3　古見道遺跡……12
（1）遺跡と確認調査の概要……12　（2）層　序……14
（3）遺構と遺物……14　（4）調査のまとめ……15

第Ⅳ章　県営ほ場整備事業吉津川地区関連

1　調査に至る経緯……16
2　西吉津川遺跡……16
（1）遺跡と確認立会い調査の概要……16　（2）遺構と遺物……17
（3）調査のまとめ……19
3　馬越遺跡……19
（1）遺跡と確認立会い調査の概要……19　（2）遺構と遺物……19
（3）調査のまとめ……19
4　荒又遺跡……20
（1）遺跡と確認立会い調査の概要……20　（2）遺構と遺物……20

（3）調査のまとめ …… 21
5　太田遺跡 …… 21
（1）遺跡と確認立会い調査の概要 …… 21
（2）遺構と遺物 …… 21
（3）調査のまとめ …… 21

第Ⅴ章　民間開発関連

1　調査に至る経緯 …… 23
2　舞台遺跡周辺地 …… 24
（1）調査対象地と試掘調査の概要 …… 24
（2）層　序 …… 25
（3）遺構と遺物 …… 25
（4）調査のまとめ …… 25
3　陣ヶ峰遺跡 …… 25
（1）調査対象地と確認調査の概要 …… 25
（2）層　序 …… 25
（3）遺構と遺物 …… 26
（4）調査のまとめ …… 26
4　陣ヶ峰北遺跡 …… 26
（1）調査対象地と確認調査の概要 …… 26
（2）層　序 …… 26
（3）遺構と遺物 …… 27
（4）調査のまとめ …… 27

第Ⅵ章　古見道遺跡の自然科学分析

1　はじめに …… 28
2　放射性炭素年代測定 …… 28
（1）試　料 …… 28
（2）分析方法 …… 28
（3）結　果 …… 29
3　樹種同定 …… 29
（1）試　料 …… 29
（2）分析方法 …… 29
（3）結　果 …… 30
（4）考　察 …… 30

第Ⅶ章　まとめ

≪引用・参考文献≫ …… 32
≪別　　表≫ …… 33
1　堀割遺跡　土器観察表 …… 33
2　古見道遺跡　磁器観察表 …… 33
3　古見道遺跡　石器観察表 …… 33
4　古見道遺跡　木製品観察表 …… 33
5　西吉津川遺跡　土器観察表 …… 33
6　馬越遺跡　土器観察表 …… 34
7　荒又遺跡　土器観察表 …… 34
8　太田遺跡　土器観察表 …… 34
9　陣ヶ峰北遺跡　土器観察表 …… 34
≪報告書抄録≫ …… 巻末

挿図目次

第 1 図　調査対象遺跡・地区位置図……2
第 2 図　試掘調査対象地位置図……3
第 3 図　五反田村移転略図……4
第 4 図　明治 34 年信濃川測量図……5
第 5 図　五反田地区試掘調査トレンチ位置図……6
第 6 図　五反田地区試掘調査トレンチ土層柱状図……6
第 7 図　山島新田・加茂新田地区試掘調査トレンチ位置図……7
第 8 図　山島新田・加茂新田地区試掘調査トレンチ土層柱状図……8
第 9 図　鵜森地区試掘調査トレンチ位置図……9
第 10 図　鵜森地区試掘調査トレンチ土層柱状図……10
第 11 図　堀割遺跡推定範囲と調査対象地位置図……12
第 12 図　堀割遺跡確認調査出土遺物……12
第 13 図　古見道遺跡推定範囲と調査対象地位置図……13
第 14 図　古見道遺跡推定範囲と調査対象地位置図……13
第 15 図　古見道遺跡土層柱状図……13
第 16 図　古見道遺跡遺構全体略図……13
第 17 図　古見道遺跡確認調査出土遺物……14
第 18 図　調査対象遺跡位置図……17
第 19 図　西吉津川遺跡出土遺物……18
第 20 図　馬越遺跡出土遺物……19
第 21 図　荒又遺跡出土遺物……20
第 22 図　太田遺跡出土遺物……22
第 23 図　舞台遺跡推定範囲と調査対象地位置図……24
第 24 図　舞台遺跡周辺地試掘調査トレンチ位置図……24
第 25 図　舞台遺跡周辺地試掘調査トレンチ土層柱状図……24
第 26 図　陣ヶ峰遺跡・陣ヶ峰北遺跡推定範囲と調査対象地位置図……25
第 27 図　陣ヶ峰遺跡確認調査トレンチ位置図……26
第 28 図　陣ヶ峰遺跡確認調査トレンチ土層柱状図……26
第 29 図　陣ヶ峰北遺跡確認調査トレンチ位置図……27
第 30 図　陣ヶ峰北遺跡確認調査トレンチ土層柱状図……27
第 31 図　陣ヶ峰北遺跡確認調査出土遺物……27
第 32 図　木材……30

表　目　次

第 1 表　発掘調査工程表……1
第 2 表　試掘調査履歴一覧……3
第 3 表　放射性炭素年代測定結果……29
第 4 表　暦年較正結果……29

写真図版目次

写真図版 1　【五反田　山島新田　加茂新田　鵜森地区】 五反田　山島新田　加茂新田　鵜森地区周辺の空中写真　五反田地区　調査地近景（東から）　五反田地区　3 トレンチ調査風景（西から）　五反田地区　1 トレンチ土層断面（南から）　五反田地区　3 トレンチ土層断面（南から）

写真図版 2　【山島新田　加茂新田地区】 山島新田地区　11 ～ 15 トレンチ周辺近景（西から）　加茂新田地区　21 ～ 23 トレンチ周辺近景（東から）　加茂新田地区　22 トレンチ調査風景（北から）　加茂新田地区　32 トレンチ調査風景（北東から）　山島新田地区　12 トレンチ土層断面（西から）　山島新田地区　18 トレンチ土層断面（南から）　山島新田地区　19 トレンチ土層断面（南から）　加茂新田地区　22 トレンチ土層断面（南から）

写真図版 3　【加茂新田　鵜森地区】 加茂新田地区　24 トレンチ土層断面（東から）　加茂新田地区　25 トレンチ土層断面（西から）　加茂新田地区　26 トレンチ土層断面（西から）　加茂新田地区　27 トレンチ土層断面（東から）　鵜森地区　1 ～ 3 トレンチ周辺近景（北から）　鵜森地区　7 トレンチ調査風景（北東から）　鵜森地区　5 トレンチ土層断面（北東から）　鵜森地区　7 トレンチ土層断面（南西から）

写真図版 4　【堀割遺跡　古見道遺跡】 堀割遺跡　調査地近景（東から）　堀割遺跡　調査地近景（南東から）　堀割遺跡　土層断面（北東から）　堀割遺跡　出土遺物　古見道遺跡　遠景（南西から）　古見道遺跡　調査風景（北西から）　古見道遺跡　全景（北西から）　古見道遺跡　全景（南東から）

写真図版 5　【古見道遺跡】 古見道遺跡　基本土層断面（北から）　古見道遺跡　SP1 確認状況（北から）　古見道遺跡　SP2 確認状況（北から）　古見道遺跡　SP4 砥石出土状況（東から）　古見道遺跡　出土遺物

写真図版６　【西吉津川遺跡　馬越遺跡　荒又遺跡　太田遺跡】 西吉津川遺跡　馬越遺跡　荒又遺跡　太田遺跡周辺の空中写真　西吉津川遺跡　調査風景（南から） 西吉津川遺跡　調査風景（南西から） 西吉津川遺跡　調査風景（東から） 西吉津川遺跡　遺構確認状況（南東から）

写真図版７　【西吉津川遺跡】 西吉津川遺跡　出土遺物

写真図版８　【馬越遺跡】 馬越遺跡　調査風景（北から） 馬越遺跡　調査風景（北から） 馬越遺跡　調査風景（西から） 馬越遺跡　調査風景（東から） 馬越遺跡　土層断面（東から） 馬越遺跡　土層断面（西から） 馬越遺跡　出土遺物

写真図版９　【荒又遺跡】 荒又遺跡　調査風景（南西から） 荒又遺跡　調査風景（南東から） 荒又遺跡　土層断面（南から） 荒又遺跡　土層断面（南東から） 荒又遺跡　出土遺物

写真図版10　【太田遺跡】 太田遺跡　調査風景（北から） 太田遺跡　調査風景（東から） 太田遺跡　出土遺物

写真図版11　【舞台遺跡周辺地　陣ヶ峰遺跡　陣ヶ峰北遺跡】 舞台遺跡周辺地　調査地近景（南から） 舞台遺跡周辺地　２トレンチ調査風景（東から） 舞台遺跡周辺地　１トレンチ土層断面（北から） 舞台遺跡周辺地　３トレンチ土層断面（北から） 陣ヶ峰遺跡　陣ヶ峰北遺跡周辺の空中写真

写真図版12　【陣ヶ峰遺跡　陣ヶ峰北遺跡】 陣ヶ峰遺跡　調査地近景（北西から） 陣ヶ峰遺跡　１トレンチ調査風景（北から） 陣ヶ峰遺跡　１トレンチ土層断面（西から） 陣ヶ峰遺跡　２トレンチ土層断面（西から） 陣ヶ峰北遺跡　調査地近景（北から） 陣ヶ峰北遺跡　１トレンチ調査風景（南から） 陣ヶ峰北遺跡　１トレンチ土層断面（東から） 陣ヶ峰北遺跡　出土遺物

第Ⅰ章　序　説

1　平成 19 年度事業の概要

平成 19 年度は、年度当初から県営ほ場整備事業吉津川地区に伴う荒又遺跡・太田遺跡発掘調査と信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業に伴う占用地解除済み区域を対象とした試掘調査が予定されていた。舞台遺跡周辺地での民間開発は年度当初に把握していない案件である。本調査の期間が比較的短期であったことから、試掘調査も柔軟に対処できた。なお、整理作業については現場と併行し、ほ場整備事業に伴い平成 17・18 年度に発掘調査した馬越遺跡と国道 403 号交通連携事業に伴い平成 18 年度に発掘調査した馬越遺跡に対して行っている。

2　平成 20 年度事業の概要

平成 20 年度は、本調査がなくなり、試掘調査が 1 事業 3 地区、確認調査が 4 事業 6 遺跡を対象とした。確認調査のうち、4 遺跡が立会い調査で遺物の採集を主に行ったものである。堀割遺跡を除き、従前から計画していた事業であった。なお、整理作業については平成 19 年度同様に継続したが、国道 403 号交通連携事業に伴う馬越遺跡の発掘調査報告書を刊行した。

3　平成 21 年度事業の概要

平成 21 年度においては開発事業が少なく、年度当初からは県営ほ場整備事業吉津川地区に伴う確認調査だけが予定されていた。古見道遺跡は工事中の連絡により、急遽対応したものである。緊急雇用事業では 1 遺跡、1 地区を対象に試掘・確認調査を行った。なお、整理作業については平成 20 年度同様に継続したが、県営ほ場整備事業吉津川地区に伴う馬越遺跡の発掘調査報告書を刊行した。

年度	調査	遺跡名・地区名	遺跡の主な時代	月　※現場調査期間												備考
				4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
平成 19 年度	試掘	山島新田・五反田地区				―				―				―		
	試掘	舞台遺跡周辺地							―							
	本調査	荒又遺跡	古墳 古代					――								本書未収載
	本調査	太田遺跡	古代						――							本書未収載
平成 20 年度	確認	陣ヶ峰遺跡	縄文 古代			―										
	確認	陣ヶ峰北遺跡	縄文 古代							―						
	確認 （立会い）	稲荷浦遺跡・横土居遺跡・西吉津川遺跡	古代 中世							――						
	試掘	山島新田・加茂新田・鵜森地区			―						―		―			
	確認 （立会い）	堀割遺跡													―	
平成 21 年度	確認	古見道遺跡	縄文 中世	―												
	確認 （立会い）	馬越遺跡・太田遺跡・荒又遺跡・新堀遺跡	古代 中世							――						
	試掘	下大谷地区							――							緊急雇用事業 本書未収載
	確認	川向遺跡	縄文				――									緊急雇用事業 本書未収載

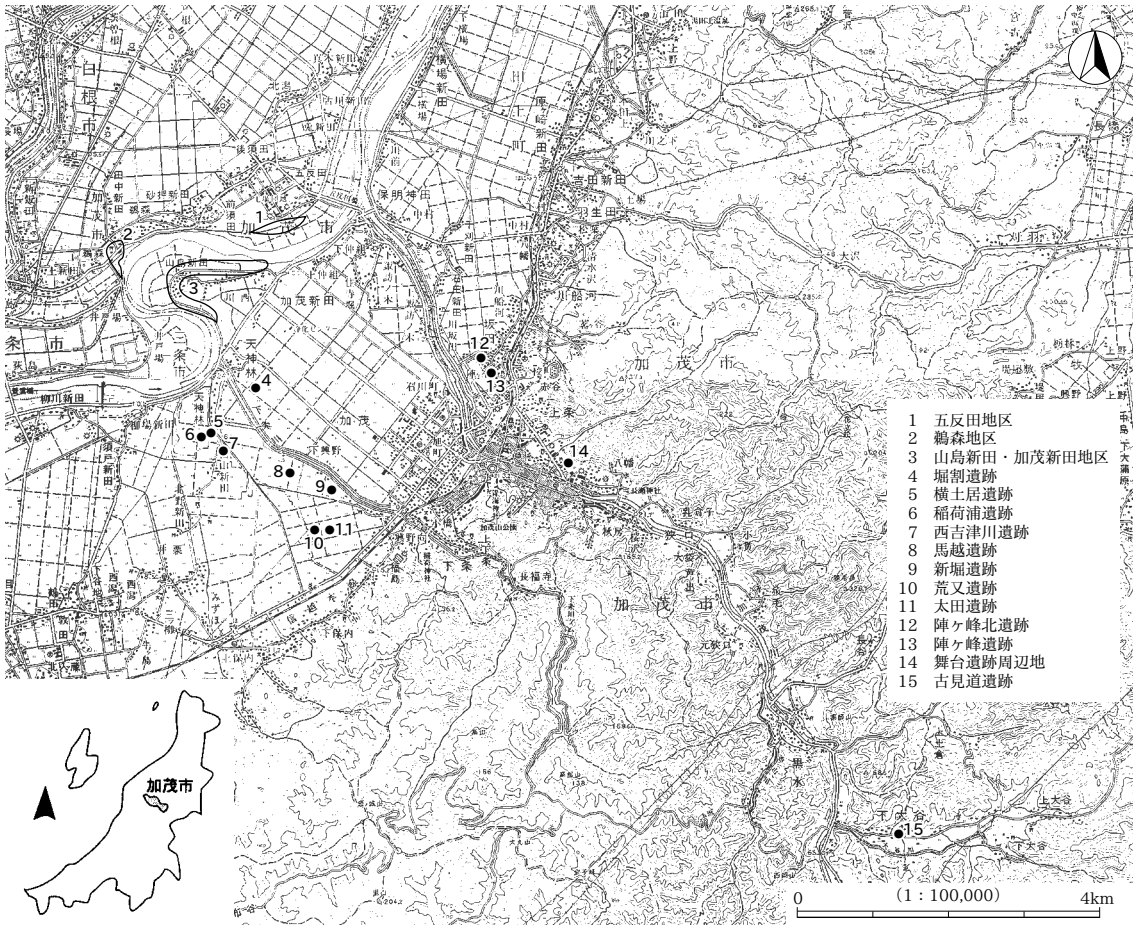
第 1 表　発掘調査工程表

4　遺跡の位置と環境（第１図）

加茂市は新潟県の県央域に位置し、中越地区にあたる。地勢は東部に高さ 1,000 mを超える粟ケ岳、権ノ神岳などの山岳が聳え、粟ケ岳を源とする加茂川が大谷川、高柳川などの支流を集め、谷底平野を縦貫し、信濃川に注いでいる。流域延長は約 11km を測る。

加茂川上流部は「七谷」地区と呼ばれ、加茂川及び支流が小規模な段丘を形成し、旧石器時代～縄文時代の遺跡が多く分布する一方、弥生～古代の遺跡は少なく、中世は山上に小規模な山城や信仰関連遺物が多く確認される特徴がある。加茂川が東山丘陵を抜けた現市街地域は扇状地形であり、弥生時代後期後半頃に開発が開始され、古墳時代前期に一層開発が進行する状況が知られる。その後、若干の空白期間を挟み、奈良・平安時代により多くの遺跡が出現する様子が鮮明である。

古見道遺跡は加茂川上流域の山間地で、大谷川右岸に立地する。陣ヶ峰遺跡と陣ヶ峰北遺跡は加茂川下流域右岸の扇状地端部付近に立地する縄文、古代の遺跡である。堀割遺跡、稲荷浦遺跡、横土居遺跡、西吉津川遺跡、馬越遺跡、新堀遺跡、太田遺跡、荒又遺跡は下条川流域に展開した古代・中世を主体とする遺跡である。堀割遺跡が右岸で他は左岸域に立地する。舞台遺跡は加茂川右岸で、山城直下の低地に位置する。山島新田、五反田、加茂新田、鵜森の各地区は加茂市域北部の須田地域にあり、信濃川両岸域に位置する。須田地域で確認された遺跡は少なく、中世以前の遺跡は全く確認されていない。



第１図　調査対象遺跡・地区位置図（S=1:100,000）

（国土地理院　平成２年発行〔加茂〕・平成９年発行〔新津〕・平成４年発行〔弥彦〕・平成８年発行〔三条〕 S=1:50,000 原図）

第Ⅱ章　信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業関連

1　調査に至る経緯

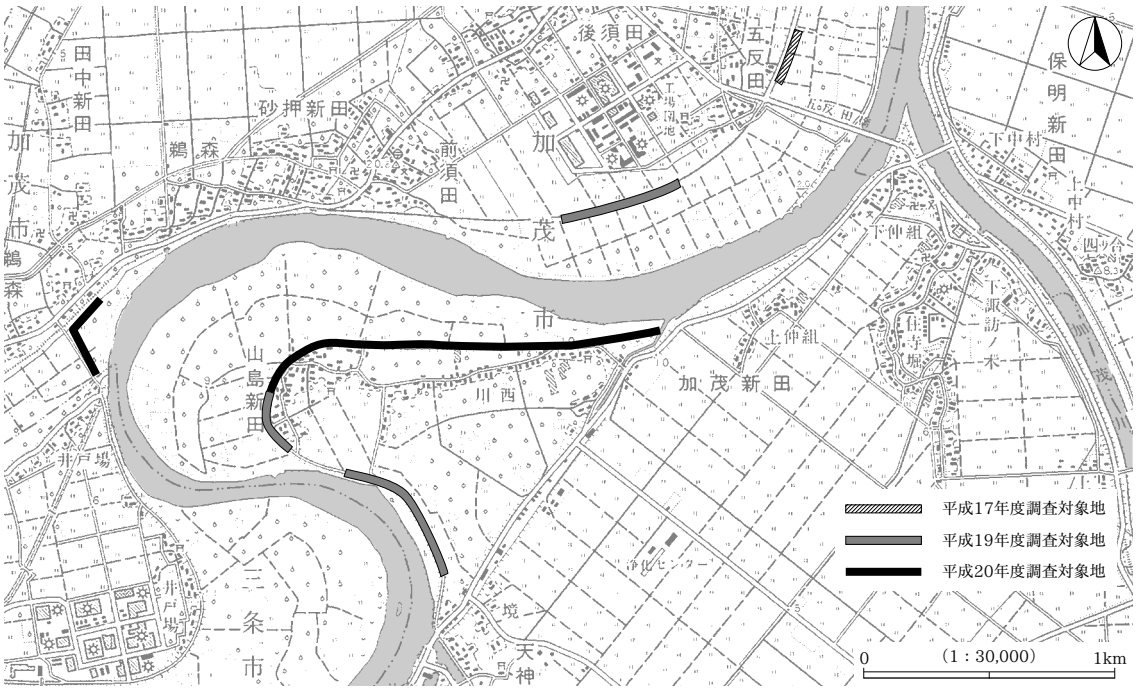
信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業は平成 15 年度以降、信濃川堤防強化対策事業として施工されてきたが、平成 16 年新潟・福島豪雨（7・13 水害）により、復緊事業となり、施工範囲と工期短縮が計画された。本事業に対する埋蔵文化財の取扱いは、複数の市町村が関係した事業であることから、県教育庁文化行政課（以下、県文化行政課）主導の下に進められた。加茂市教育委員会（以下、市教委）では平成 17 年 11 月に、事業地内の現況観察を行い、試掘調査必要区域の検討を行った。その後、平成 18 年 1 月に、五反田地区の一部分について試掘調査を実施した［伊藤 2008b］。

平成 19 年度、平成 20 年度ともに年度当初に協議を行い、各々占用地解除が行われ、用地の都合がついたところから、工事着手前に試掘調査を行うこととした。平成 19 年度が五反田と山島新田地区、平成 20 年度が山島新田、加茂新田、鵜森地区が対象となった。

事務的な手続きは、平成 19 年度は河川敷地の一時占用届を平成 19 年 6 月 11 日付け民資第 111 号、平成 19 年 9 月 28 日付け民資第 181 号、平成 20 年 2 月 22 日付け民資第 37 号で信濃川下流河川事務所三条出張所長宛てに行った。合わせて埋蔵文化財発掘調査の報告を平成 19 年 6 月 14 日付け民資第 115 号、平成 19 年 10 月 2 日付け民資第 185 号、平成 20 年 2 月 27 日付け民資第 42 号で新潟県教育委員会教育長宛てに行い、調査の準備に入った。

調査年次	調査地区	調査対象域	調査面積	試掘坑数	文献
平成 18 年(2006)　1.18	五反田	270m	20.5m^2	4	伊藤 2008b
平成 19 年(2007)　6.14	山島新田	520m	26.5m^2	2	本書
平成 19 年(2007)　10.3	五反田	520m	64m^2	5	本書
平成 20 年(2008)　2.28	山島新田	250m	69.6m^2	4	本書
平成 20 年(2008)　5.13 ～ 5.15	山島新田 加茂新田	1,050m	129.8m^2	17	本書
平成 20 年(2008)　11.6 ～ 11.7	加茂新田	600m	63.4m^2	9	本書
平成 21 年(2009)　1.29 ～ 1.30	鵜森	450m	53m^2	8	本書

第 2 表　試掘調査履歴一覧



第 2 図　試掘調査対象地位置図（S=1:30,000）

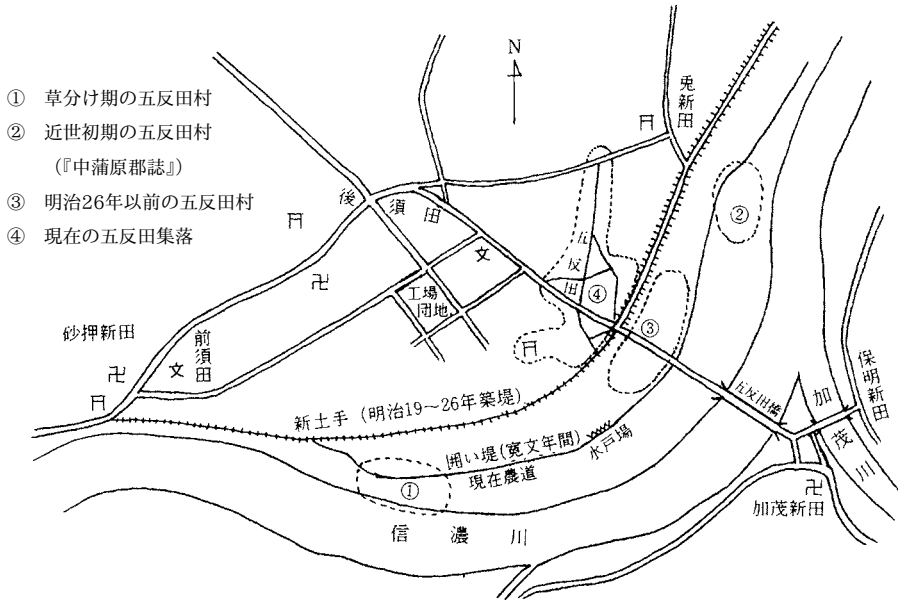
（国土地理院　平成 14 年発行〔越後吉田〕・平成 15 年発行〔矢代田〕 S=1:25,000 原図）

2　五反田地区

（1）調査対象地と試掘調査の概要（第２～５図）

調査対象地は加茂市北西部の須田地区で、加茂市大字五反田地内にある。信濃川左岸で現堤防外地にあたる。現況は標高約 6m 前後の水田である。五反田村は慶長３年（1598）頃の新発田御領内高付帳で高 168 石６斗余と記され［関 1986］、16 世紀には成立していた本田村と見られる。五反田集落については、史料により第３図のとおり四段階以上、移転の歴史がある［関 1984］。今回の調査対象区は寛文年間の囲い堤と明治の新土手との間に位置する。第４図の明治 34 年測量図には池状に描写されており、新土手築造の際に掘削された地点を含むものと見られる。なお、周辺には三枚田、大割向などの小字名が残る。

試掘調査は、平成19年10月３日に行った。延長520mの範囲を対象とした。重機により約3.0m×4.5mのトレンチを掘削し、遺構・遺物の検出及び土層堆積の確認を行った。必要な測量と写真撮影後、すぐに点圧しながら埋め戻しを行った。合計で５トレンチ、約 64m^2 の調査を行った。



第３図　五反田村移転略図
（［関 1894］から転載）

（2）層　序（第６図）

１～５トレンチとも類似した土層堆積状況である。Ⅰ層耕作土、Ⅱ層床土、Ⅲ層以下には砂質土及び腐植物層の堆積が顕著となる。掘削最大深度内においては、遺物包含層及び遺構確認面は確認できなかった。

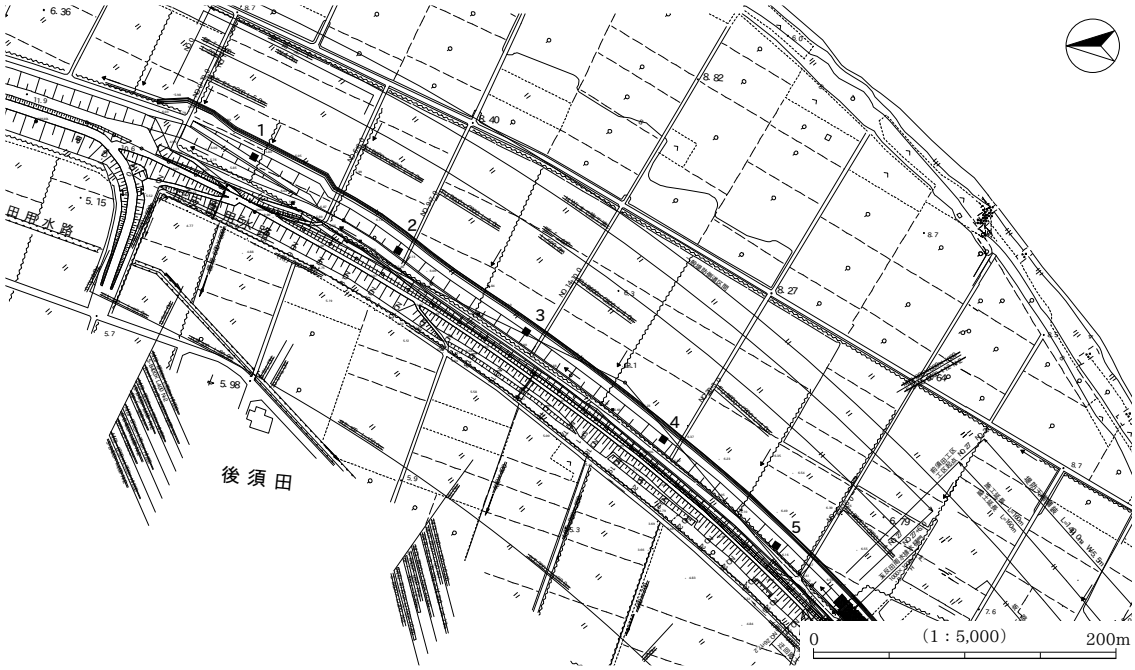
（3）遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できなかった。

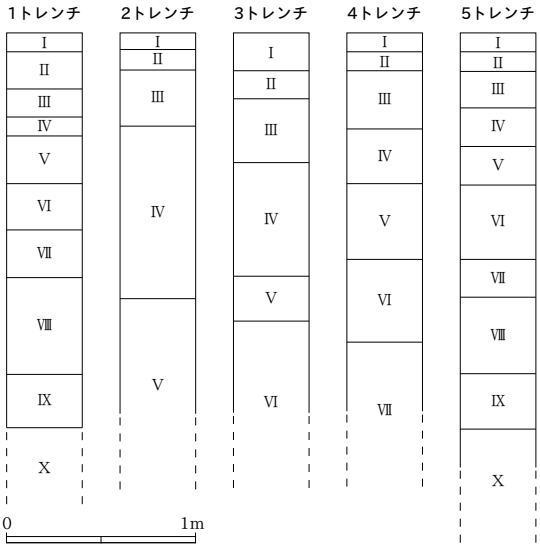
（4）調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認されなかった。

第４図　明治 34 年信濃川測量図
（信濃川下流河川工事事務所提供）



第５図　五反田地区試掘調査トレンチ位置図（S=1:5,000）
（信濃川下流河川工事事務所提供平面図　S=1:1,000 原図）



土層注記

1トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　床土
Ⅲ　暗灰砂質土
Ⅳ　暗灰粘質土
Ⅴ　暗灰茶粘質土　砂層混じる
Ⅵ　灰色腐植物層
Ⅶ　灰色腐植物層
Ⅷ　灰色腐植物層
Ⅸ　砂質　粘土層と互層を呈す
Ⅹ　砂層及び腐植物

2トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　床土
Ⅲ　暗灰粘質土
Ⅳ　砂質
Ⅴ　灰色腐植物層

3トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　床土
Ⅲ　暗灰色腐植物層
Ⅳ　砂層　目が細かい
Ⅴ　砂層　目が粗い
Ⅵ　暗灰茶色腐植物層

4トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　床土
Ⅲ　暗灰茶色粘質土と砂層の互層
Ⅳ　Ⅲ層に同じ
Ⅴ　Ⅳ層に同じ
Ⅵ　灰色腐植物層
Ⅶ　暗灰茶色腐植物層

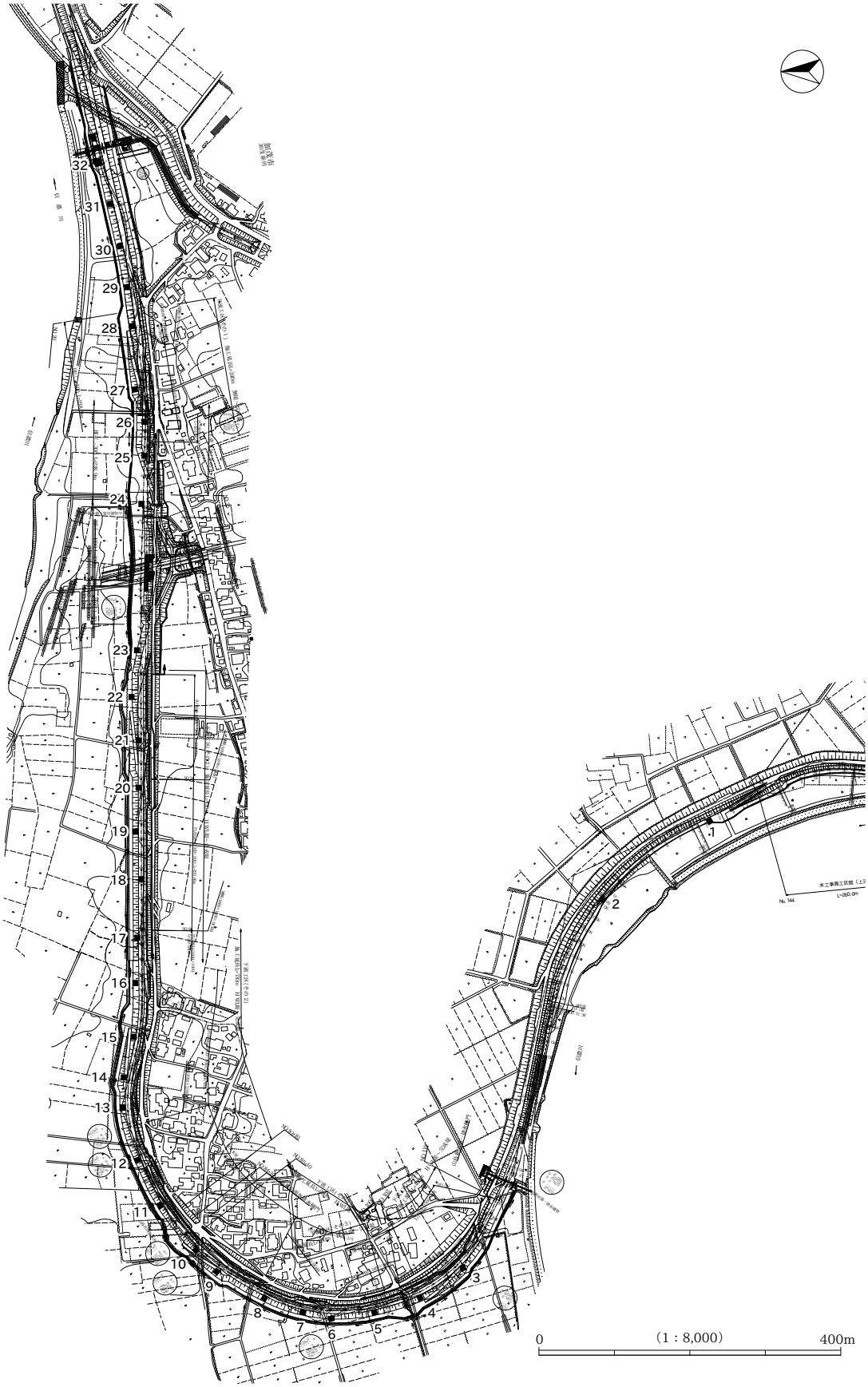
5トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　床土
Ⅲ　暗灰色土
Ⅳ　暗灰茶色土
Ⅴ　暗灰茶色粘質土と砂層の互層
Ⅵ　Ⅴ層に同じ
Ⅶ　灰色腐植物層　砂層混じる
Ⅷ　Ⅶ層に同じ
Ⅸ　砂層
Ⅹ　暗灰茶色腐植物層

第６図　五反田地区試掘調査トレンチ土層柱状図（S=1:40）

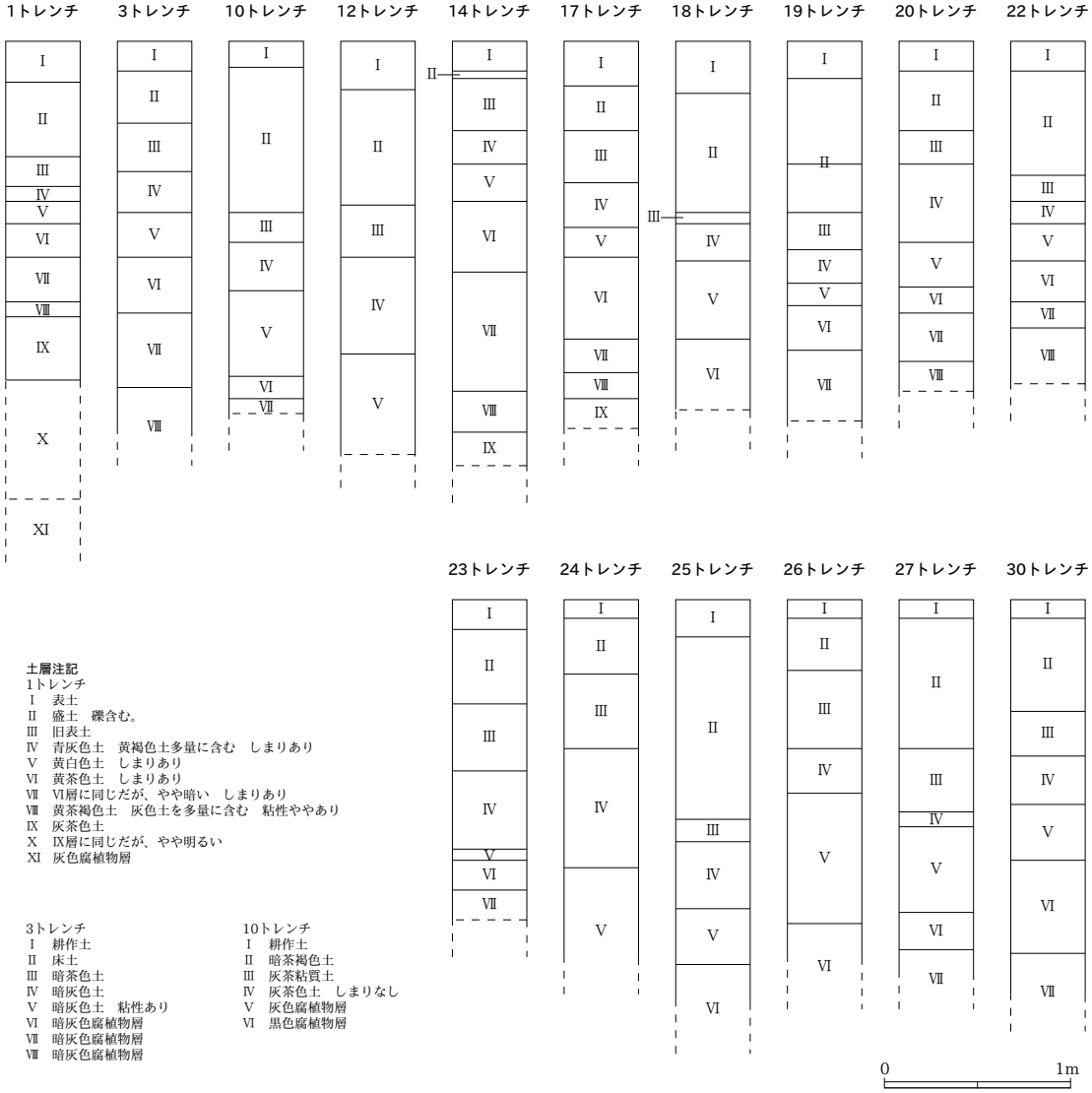
3　山島新田・加茂新田地区

（1）調査対象地と試掘調査の概要（第２・４・７図）

調査対象地は加茂市北西部で、加茂市大字山島新田及び加茂新田地内にある。信濃川右岸で現堤防外地にあたる。信濃川が大きく蛇行し、流路に沿い緩やかなU字状に集落が形成されている。現況は標高約８～９m 前後の水田や果樹畑である。山島新田は新発田藩領で、史料から慶安元年（1648）に開発立村と伝わる。現在は梨・桃の生産地として有名である。加茂新田は川西、住寺堀、諏訪ノ木、仲組などの集落があり、史料から寛永 21 年（1644）開発立村と伝わる。今回の調査対象区域は川西地区にあたる。明治34年測量図にはところにより池状に描写されており、新土手築造の際に掘削されたものと見られる。なお、



第７図　山島新田・加茂新田地区試掘調査トレンチ位置図（S=1:8,000）
（信濃川下流河川工事事務所提供平面図　S=1:1,000 原図）



土層注記

1トレンチ
Ⅰ　表土
Ⅱ　盛土　礫含む。
Ⅲ　旧表土
Ⅳ　青灰色土　黄褐色土多量に含む　しまりあり
Ⅴ　黄白色土　しまりあり
Ⅵ　黄茶色土　しまりあり
Ⅶ　Ⅵ層に同じだが、やや暗い　しまりあり
Ⅷ　黄茶褐色土　灰色土を多量に含む　粘性ややあり
Ⅸ　灰茶色土
Ⅹ　Ⅸ層に同じだが、やや明るい
Ⅺ　灰色腐植物層

3トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　床土
Ⅲ　暗茶色土
Ⅳ　暗灰色土
Ⅴ　暗灰色土　粘性あり
Ⅵ　暗灰色腐植物層
Ⅶ　暗灰色腐植物層
Ⅷ　暗灰色腐植物層

10トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　暗茶褐色土
Ⅲ　灰茶粘質土
Ⅳ　灰茶色土　しまりなし
Ⅴ　灰色腐植物層
Ⅵ　黒色腐植物層

12トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　茶褐色土
Ⅲ　青灰色粘質土
Ⅳ　暗灰色腐植土
Ⅴ　灰茶色土
Ⅵ　灰色砂層

14トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　青灰色土
Ⅲ　茶色土
Ⅳ　暗茶色土
Ⅴ　茶色土
Ⅵ　暗茶色土
Ⅶ　茶色粘質土
Ⅷ　灰茶色土
Ⅸ　茶色砂層

17トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　茶色土
Ⅲ　暗茶色土
Ⅳ　茶色粘質土
Ⅴ　茶色土
Ⅵ　茶色土
Ⅶ　灰色砂層
Ⅷ　灰色粘質土
Ⅸ　青灰色土

18トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　茶色土
Ⅲ　暗茶色土
Ⅳ　茶色土
Ⅴ　茶色土
Ⅵ　灰色砂層

19トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　茶色土
Ⅲ　茶色土
Ⅳ　茶色砂質土
Ⅴ　灰茶色砂質土
Ⅵ　灰茶色砂質土
Ⅶ　灰色砂質土
Ⅷ　灰茶色粘質土

20トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　茶色土
Ⅲ　茶色土
Ⅳ　茶色土
Ⅴ　茶色土
Ⅵ　灰茶色土
Ⅶ　暗灰茶色土
Ⅷ　灰茶色砂質土

22トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　茶色土
Ⅲ　灰茶色土
Ⅳ　灰茶色土
Ⅴ　灰茶色土
Ⅵ　暗灰茶色土
Ⅶ　黄茶褐色土
Ⅷ　黄茶褐色土と砂層の互層

23トレンチ
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　茶色土
Ⅲ　茶色土
Ⅳ　灰茶色土
Ⅴ　灰茶色土
Ⅵ　灰茶色土
Ⅶ　灰茶色土

24トレンチ
Ⅰ　表土
Ⅱ　茶色土
Ⅲ　茶色土
Ⅳ　茶色土（噴砂に切られる）
Ⅴ　茶色土（噴砂に切られる）

25トレンチ
Ⅰ　表土
Ⅱ　茶色土
Ⅲ　黒茶色土（近現代陶磁器出土）
Ⅳ　灰茶色土
Ⅴ　灰茶色土
Ⅵ　灰色土

26トレンチ
Ⅰ　表土
Ⅱ　茶色土
Ⅲ　暗茶色土
Ⅳ　暗茶色土　灰色土が帯状に入る
Ⅴ　暗茶色土　しまりあり
Ⅵ　暗茶色土　灰色土含む

27トレンチ
Ⅰ　表土
Ⅱ　砂層
Ⅲ　黄白色砂層
Ⅳ　灰色粘質土（噴砂に切られる）
Ⅴ　茶色土　果樹の根多し（噴砂に切られる）。
Ⅵ　灰茶色土（噴砂に切られる）
Ⅶ　灰色土　しまりなし（噴砂に切られる）。

30トレンチ
Ⅰ　表土
Ⅱ　砂層
Ⅲ　黄茶色砂層
Ⅳ　砂層（噴砂に切られる）
Ⅴ　砂質土（噴砂に切られる）
Ⅵ　黄茶色土と青灰色粘質土との混合層（噴砂に切られる）
Ⅶ　茶色砂層（噴砂に切られる）

第８図　山島新田・加茂新田地区試掘調査トレンチ土層柱状図（S=1:40）

周辺には、北から居掛下川原、小土居内、中野、居浦、箕輪などの小字名が残る。

試掘調査は、平成 19 年 6 月 14 日（1、2 トレンチ）、平成 20 年 2 月 28 日（3 ～ 6 トレンチ）、平成 20 年 5 月 13 日～ 15 日（7 ～ 23 トレンチ）、平成 20 年 11 月 6 日～ 7 日（24 ～ 32 トレンチ）の 2 カ年度、4 次に渡り行われた。重機により約 2.0m × 4.0m、約 3.0m × 4.5m、約 3.0m × 6.0m のトレンチを掘削し、遺構・遺物の検出及び土層堆積の確認を行った。必要な測量と写真撮影後、すぐに点圧しながら埋め戻しを行った。調査は総延長 2,420m を対象とし、合計で 32 トレンチ、約 289.3m^2 である。

（2）層　序（第 8 図）

各区域でやや異なる土層堆積状況である。Ⅰ層耕作土は共通するが、以下、盛土層が存在するところもある。概ね山島新田区域では腐植物層が、川西区域では砂質土の堆積が顕著に見られた。掘削最大深度内においては遺物包含層及び遺構確認面は確認できなかった。なお、24、27、30 トレンチの土層断面に砂脈の立ち上がりが確認でき、強い地震による噴砂と判断される。近世以降の地震によるものと考えられる。

（3）遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できなかった。9 トレンチのⅡ層、12 トレンチのⅣ層及び 25 トレンチのⅢ層から近世～現代陶磁器が出土している。

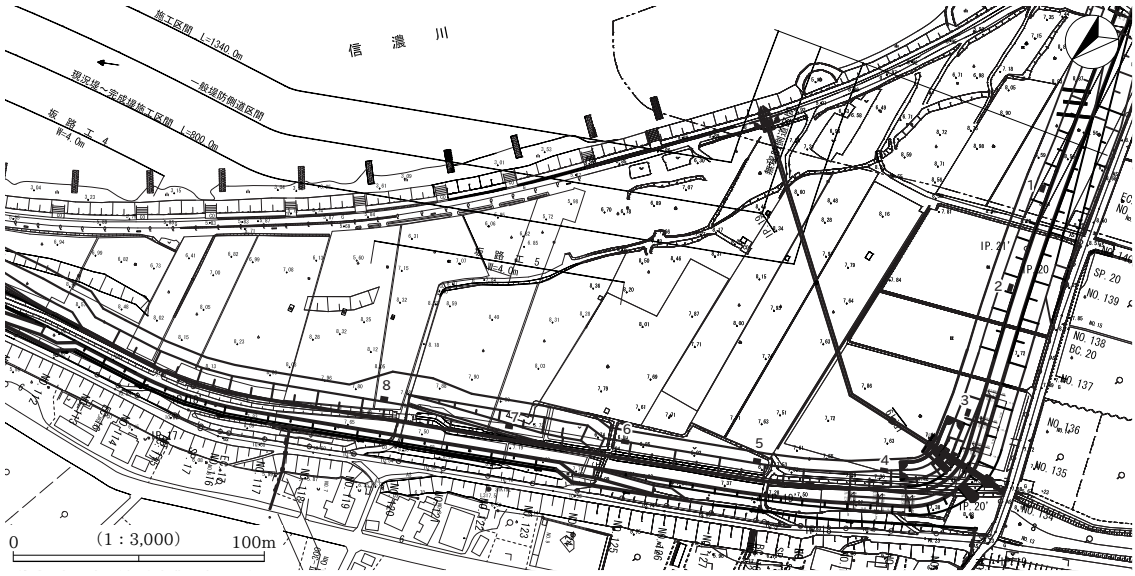
（4）調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、近世以前の遺跡は確認されなかった。

4　鵜森地区

（1）調査対象地と試掘調査の概要（第 2・4・9 図）

調査対象地は加茂市北西部の須田地区で、加茂市大字鵜森地内にある。信濃川左岸で現堤防外地にあた



第 9 図　鵜森地区試掘調査トレンチ位置図（S=1:3,000）
（信濃川下流河川工事事務所提供平面図　S=1:1,000 原図）

る。現況は標高約8m前後の荒地である。慶長３年(1598)頃の新発田御領内高付帳に「鵜ノ森村」と記され、16世紀には成立していた本田村と見られる。今回の調査対象区周辺には江内、川原などの小字名が残る。

試掘調査は、平成21年１月29日～30日に行った。重機により約2.0m × 4.0mのトレンチを掘削し、遺構・遺物の検出及び土層堆積の確認を行った。必要な測量と写真撮影後、すぐに点圧しながら埋め戻しを行った。合計で８トレンチ、約53m^{2}の調査を行った。

（2）層　序（第10図）

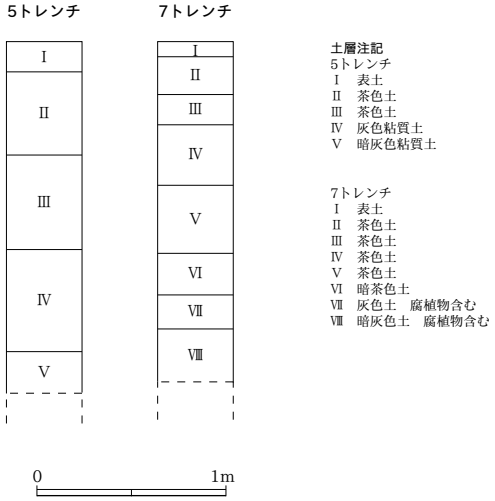
地点により異なる土層堆積状況であるが、概ねⅠ層表土の下位には茶色土が厚く堆積し、河川堆積層はその下層に見られる。なお、５トレンチではⅢ～Ⅴ層を貫き、Ⅲ層中で終る地震による液状化現象に起因する噴砂が認められた。近世以降の地震によるものであろう。掘削最大深度内においては遺物包含層及び遺構確認面は確認できなかった。

（3）遺構と遺物

遺構、遺物ともに確認できない。

（4）調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認されなかった。



第10図　鵜森地区試掘調査トレンチ土層柱状図（S=1:40）

第Ⅲ章　農業基盤整備事業関連

1　調査に至る経緯

農業基盤整備事業に関連し、平成20年度1件、平成21年度1件、合計2件2遺跡の確認調査を実施した。

平成20年度の事業は加茂郷土地改良区が主体となり、延長270m間の現況土水路部分を重機で再掘削し、コンクリート2次製品の排水フリューム（400×600）を設置する改良事業である。事業が周知遺跡の堀割遺跡地内であることから、平成20年の11月下旬から協議を開始した。文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出については、平成20年11月25日付け加土改第253号で加茂郷土地改良区理事長から、新潟県教育委員会教育長宛てに出された。市教委では掘削幅及び構造物の内容から確認立会い調査が必要と判断し、埋蔵文化財の発掘について平成20年11月25日付け民資第272号で新潟県教育委員会教育長宛てに意見を添えて提出した。同時に、事業者に確認立会い調査に向けて、工事施工業者との連絡調整を依頼した。

平成21年度の事業は想定外で、急遽対応に迫られたものである。平成21年4月24日の夕方に地元の市議会議員から、「工事中に遺跡が出たようだ。施工業者と連絡するように。」との電話を頂き、翌25日に現地に急行したところ、周知遺跡である古見道遺跡地内で耕作者個人による水田の区画整理工事により、時期は不明ながら多数のピットなどの遺構が露出していることを確認した。そして関係者から5月の連休中には区画整理を終らせ、代掻きを行いたいことなどを伺い、事態は逼迫していることを認識した。直ちに県文化行政課の助言を仰ぎ、現況より掘削せずに保護盛土を行うことが可能であれば、本調査は不要とし、確認調査を市内遺跡の補助金事業費から捻出し、対応するとの見通しを得た。そこで、再び工事関係者と協議し、これ以上の掘削は回避し、表土として盛土を行うこと、数日は工事を休止することが可能であることを確認した。故に本調査ではなく露出した遺構の確認調査を行うこととし、調査体制を整えた。文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出については、平成21年4月27日付けで施主から、新潟県教育委員会教育長宛てに出された。市教委では確認調査が必要と判断し、埋蔵文化財の発掘について、平成21年4月28日付け民資第91号で新潟県教育委員会教育長宛てに意見を添えて提出した。

2　堀割遺跡

（1）遺跡と確認立会い調査の概要（第11図）

堀割遺跡は大字天神林地内で下条川右岸の沖積地に立地する。下条川と信濃川の合流部に近く、現況は標高約6ｍ前後の水田が中心である。遺跡は平成7年に確認され、古代の遺物が表採されている。

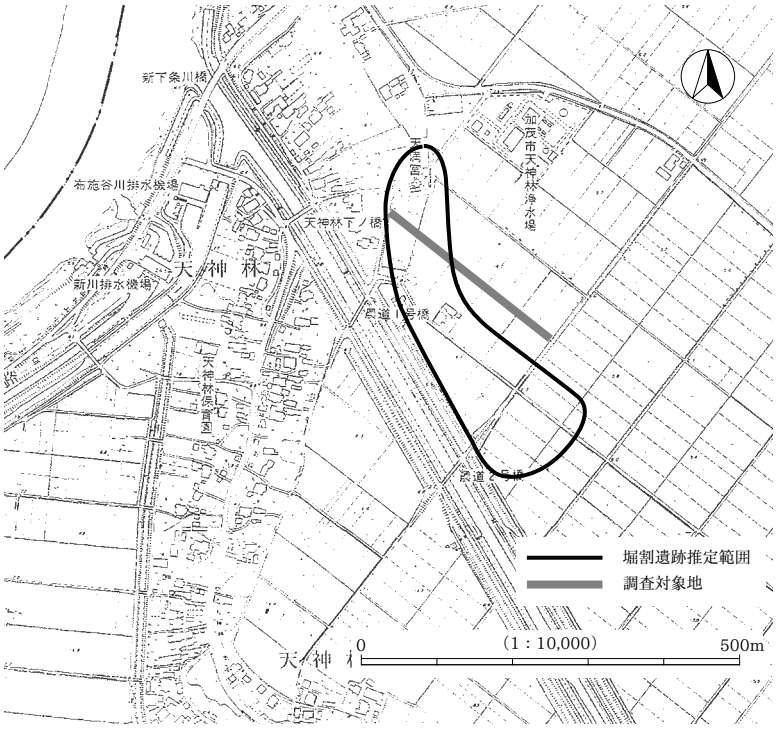
確認立会い調査は、平成21年3月13日～19日に行った。重機による掘削作業に市職員が1名張り付き、遺構・遺物の確認を行った。

（2）出土遺物（第 12 図）

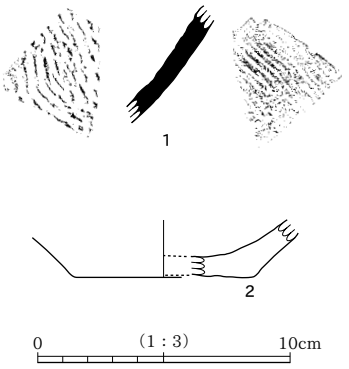
古代の須恵器 1 点、土師器 4 点が採取できた。1 は須恵器甕の体部片である。外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が見られる新津丘陵窯跡産と見られる。2 は土師器小甕の底部片である。底径は 7.0cm、底部外面に回転糸切り痕が確認できる。詳細な時期は不明であるが、概ね平安時代頃の所産であろう。

（3）調査のまとめ

現地表下約 1m に黒色土層の堆積が見られ、古代の遺物包含層と把握される。平安時代頃に営まれた集落跡が周辺に展開する可能性が高い。



第 11 図　堀割遺跡推定範囲と調査対象地位置図（S=1:10,000）
（加茂市　平成 9 年印刷　〔加茂市街図〕　S=1:10,000 原図）



第 12 図　堀割遺跡確認調査出土遺物

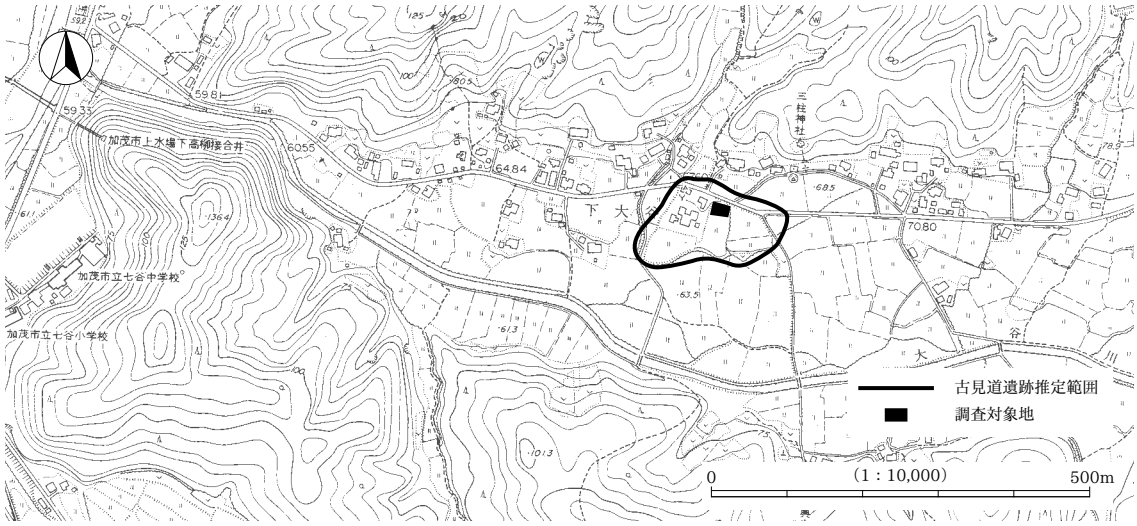
3　古見道遺跡

（1）遺跡と確認調査の概要（第 13・14 図）

古見道遺跡は加茂市南部で山間地の下大谷地内にある。大谷川右岸の丘陵裾部に位置し、民家を中心にして周辺の水田より 3m 程小高い、標高約 67m 前後である。調査地点の周辺部は既に県営ほ場整備事業により区画が改変されており、現状を留めていない。調査地点はそのほ場整備事業における区域外となっていた。

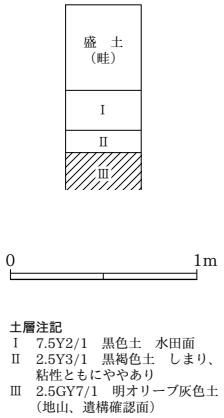
古見道遺跡は平成 7 年に縄文時代の遺跡として周知化され、県営ほ場整備事業に伴い確認調査が実施されている。今回の調査地点東側の水田も調査されたが、遺跡は確認されていない［伊藤 2000］。

確認調査は、平成 21 年 4 月 30 日の 1 日で行った。すでに遺構確認面まで掘削が及んでいたので人力で遺構検出作業を行い、遺構の平面形を明確にした。その後、コンパクトなデジタルカメラ（600 万画素）

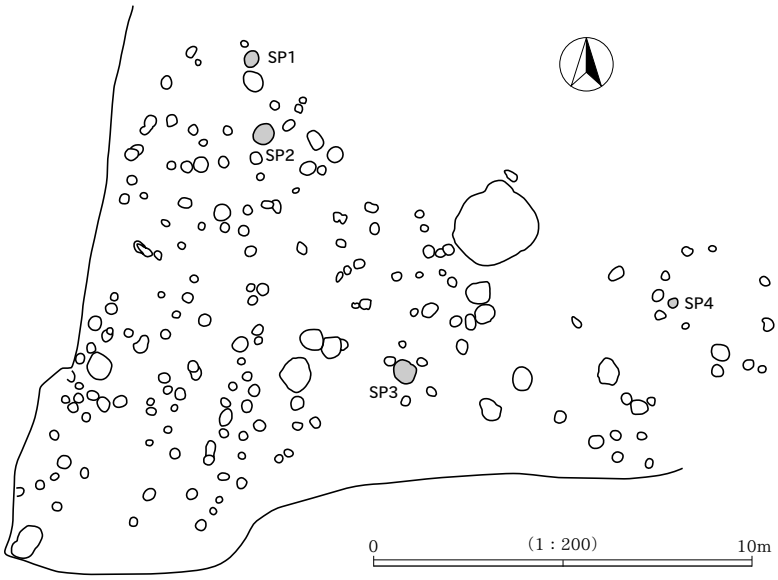


第 13 図　古見道遺跡推定範囲と調査対象地位置図（S=1:10,000）
（加茂市　昭和 52 年修正 〔加茂市全図 10〕 S=1:5,000 原図）

第 14 図　古見道遺跡推定範囲と調査対象地位置図（S=1:2,000）
（〔伊藤 2000〕に加筆して転載）



第 15 図　古見道遺跡土層柱状図（S=1:40）



第 16 図　古見道遺跡遺構全体略図（S=1:200）

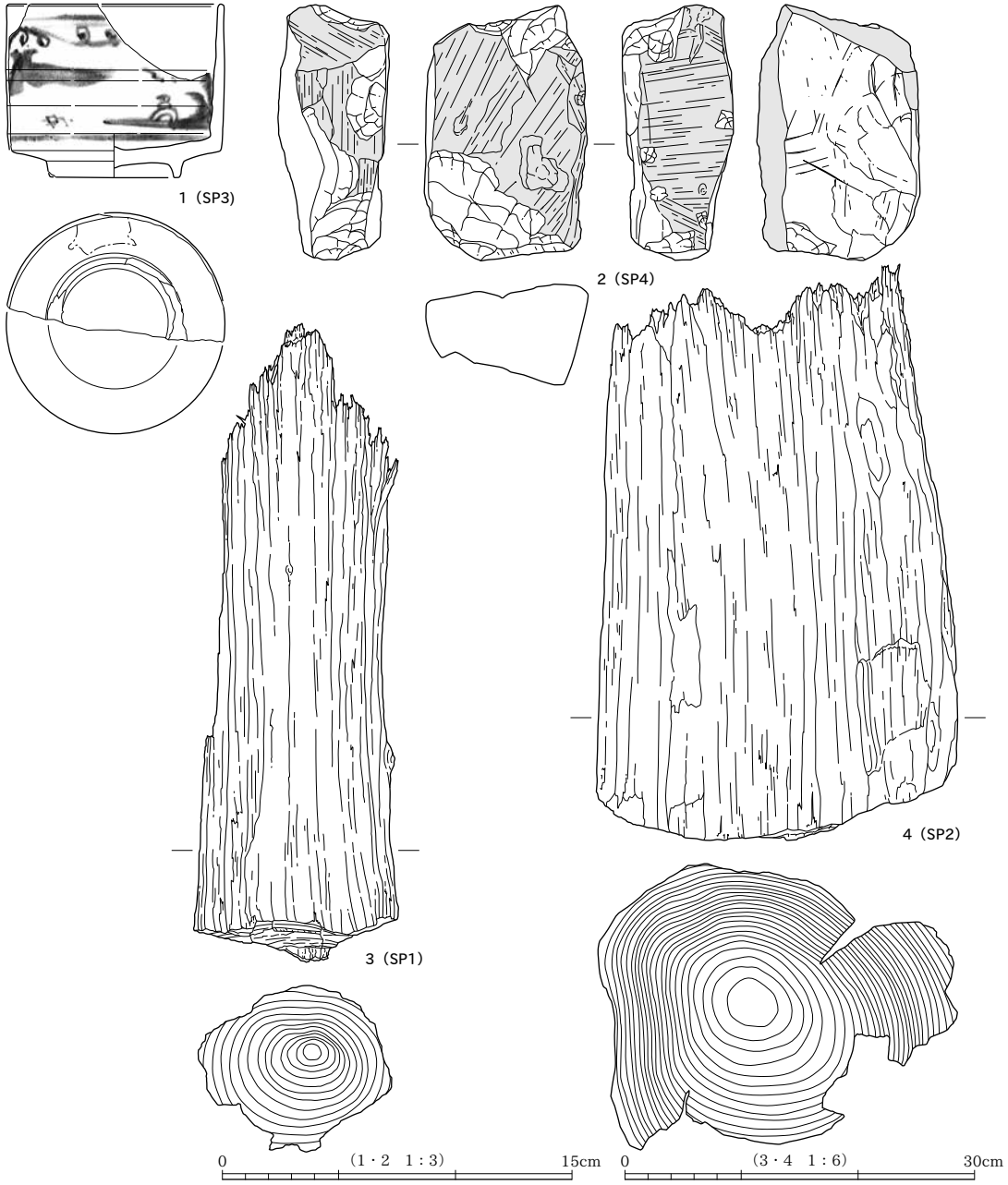
でピンポールを写し込みながら、各画面をラップさせるようにほぼ真上から撮影し、専門業者に委託してデジタル解析を施し、簡易な略平面図を作成した。あわせて遺物の検出と基本層序の確認を行った。調査面積は約 150m^2 程である。

（2）層　序（第 15 図）

基本層序はⅠ～Ⅲ層である。Ⅰ層が黒色土で水田面、Ⅱ層が黒褐色土、Ⅲ層が遺構確認面、地山で明オリーブ灰色粘質土である。遺物包含層は確認できない。

（3）遺構と遺物（第 16・17 図）

各遺構は確認面において黒褐色土を覆土とする。遺構の切り合いは少ない。調査は平面形の確認に留め



第 17 図　古見道遺跡確認調査出土遺物

ているため、その内容は不明なものが多いが、柱根が確認できる遺構が複数見られ、建物跡の存在が窺える。遺構は約 170 基確認されたが、ほとんどがピットで、確認面上では約 20 ～ 50cm の規模である。直径 200cm の大きな土坑が 1 基見られるが、井戸や塵穴の可能性が考えられよう。

遺物は少ない。1 は SP3 出土の近世磁器（初期伊万里）である。底部から体部がシャープに立ち上がる筒形碗である。高台畳付けを除き、全面に釉薬が施される。高台畳付けに離れ砂の付着が確認できる。文様はラフな山水文や唐草文が見られる。器形や文様から大橋編年Ⅱ -1 期（1610 ～ 1630 年代）［大橋 1989・野上 2000］に位置付けられよう。2 は SP4 出土の凝灰岩製の砥石、3・4 は柱根で、それぞれ SP1、2 出土である。両者とも芯持丸太で樹種はクリである。SP2 は直径 30cm と太い。

（4）調査のまとめ

今回の調査地点は、数少ない出土遺物からではあるが、17 世紀前半頃の集落跡の一部と推測される。直径 30cm を超える柱根からは特別な建物の存在も推測されるが、現状では判然としない。ただ、小字名「古見道」の道が堂からの変化とすれば、周辺にお堂や寺院などが存在した可能性もある。

第Ⅳ章　県営ほ場整備事業吉津川地区関連

1　調査に至る経緯

県営ほ場整備事業吉津川地区に伴う埋蔵文化財の取扱いについては平成 10 年から協議を行い、これまでに馬越遺跡、鬼倉遺跡、稲荷浦遺跡、横土居遺跡、西吉津川遺跡、新堀遺跡、荒又遺跡、太田遺跡、山通遺跡、新田川遺跡周辺地、吉津川遺跡周辺地、中谷地遺跡周辺地、安曲遺跡周辺地を対象に試掘・確認調査が実施されてきた［伊藤 1999・2001・2005］。各遺跡の調査結果をもとに施工方法との調整を行い、面整備区域の切土を減らし、盛土工法を採用することで、排水路と用水パイプライン布設工事部分のみを本調査の対象とした。そして平成 17 年、18 年度に馬越遺跡、19 年度に荒又遺跡、太田遺跡の本調査を行った。その後、面整備工事が終了した区域から漸次、暗渠排水工事が行われ、掘削幅が狭いことから、確認立会い調査で対応することとなった。

平成 20 年度は横土居遺跡、稲荷浦遺跡、西吉津川遺跡が対象区域に存在することから、平成 20 年 4 月 15 日付け三振農第 50 号で埋蔵文化財発掘調査について（依頼）が出された。同時に同日付けで、三振農第 52-1 号、53-1 号、54-1 号で埋蔵文化財発掘の通知が新潟県教育委員会教育長宛てに出された。市教委はそれぞれ確認立会い調査が必要と判断し、埋蔵文化財の発掘について、平成 20 年 4 月 17 日付け民資第 89 号、90 号、91 号で新潟県教育委員会教育長宛てに意見を添えて提出した。その後、工事施工業者が決定した 9 月初めに協議を行い、工程や工事内容についての確認を行った。工程は稲刈り後で吸水渠管はトレンチャーによる掘削を行い、集水渠の吐口部については重機で掘削するが、幅 1m 未満であることなどを確認し、調査の準備に入った。

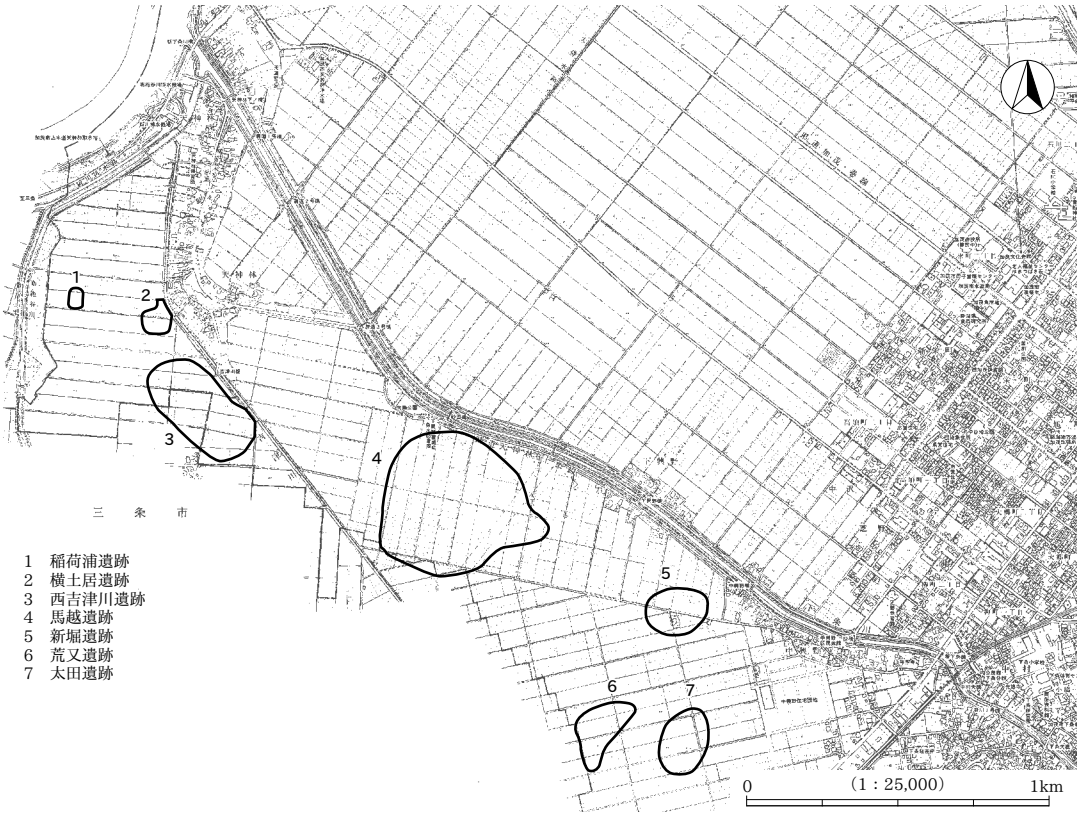
平成 21 年度は馬越遺跡、太田遺跡、荒又遺跡、新堀遺跡が対象区域に存在することから、平成 21 年 4 月 21 日付け三振農第 92 号で埋蔵文化財発掘調査について（依頼）が出された。同時に同日付けで、三振農第 93 号、94 号、95 号、96 号で埋蔵文化財発掘の通知が新潟県教育委員会教育長宛てに出された。市教委はそれぞれ確認立会い調査が必要と判断し、埋蔵文化財の発掘について、平成 21 年 4 月 24 日付け民資第 80 号、81 号、82 号、83 号で新潟県教育委員会教育長宛てに意見を添えて提出した。その後、工事施工業者が決定した 9 月下旬に協議を行い、工程や工事内容についての確認を行った。工程は稲刈り後からで工法は昨年度同様であることなどを確認し、調査の準備に入った。

以下、出土遺物が見られた遺跡について報告を行う。

2　西吉津川遺跡

（1）遺跡と確認立会い調査の概要（第 18 図）

横土居遺跡、稲荷浦遺跡、西吉津川遺跡は加茂市北西部の天神林地区で、下条川左岸の沖積地に存在する。現況は標高約 7m 前後の水田である。3 遺跡は各々平成 7 年に発見され、周知化されている。平成 11 年度に面整備工事に伴い確認調査が行われ、横土居遺跡、稲荷浦遺跡からは遺構、遺物ともに未検出であったが、西吉津川遺跡周辺から中世の遺物が出土した［伊藤 2000］。また、西吉津川遺跡については三条



第 18 図　調査対象遺跡位置図（S=1:25,000）
（加茂市　平成 9 年印刷　〔加茂市街図〕　S=1:10,000 原図）

市境にあり、市域を超えて展開している。三条市教育委員会により平成 14 年度に発掘調査が行なわれ、中世期の溝や井戸などが確認されている［田中ほか 2006］。

調査は、業者の工事日程に沿う形で、平成 20 年 10 月 4 日～ 11 月 26 日の間に行った。集水渠部分の掘削工事にはその都度立会い、遺構・遺物の検出及び土層堆積の確認を行った。暗渠管布設工事箇所については、適宜、トレンチャーによる掘削土から遺物の採集作業を行った。なお、稲荷浦遺跡地内からは遺構、遺物ともに確認できなかった。横土居遺跡地内からは遺構は確認できないが、中世の青磁片 1 点が採集された。

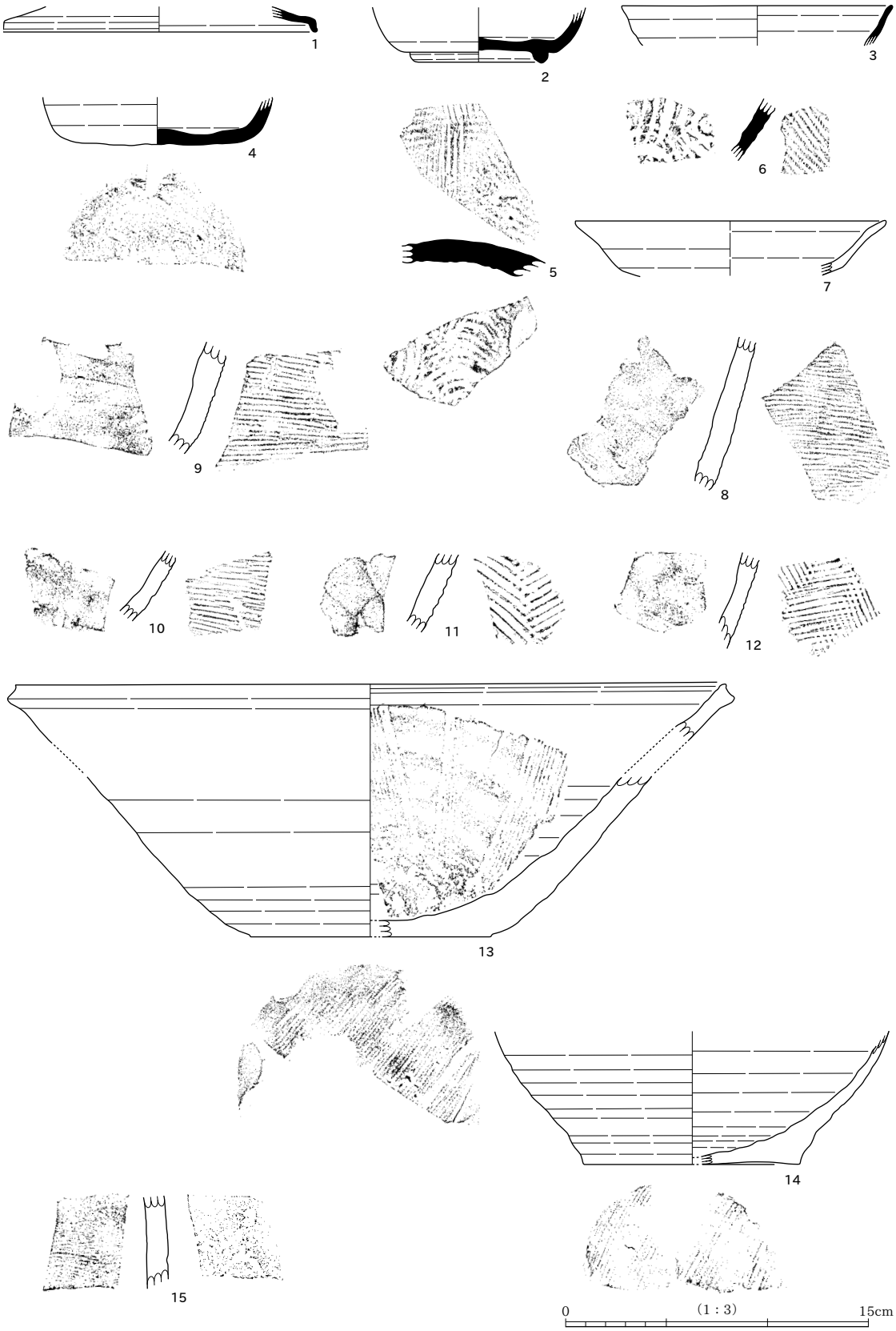
（2）遺構と遺物（第 19 図）

遺構は狭いトレンチなので、平面上では把握できないが、断面観察から溝、土坑などの遺構が数カ所で確認された。遺物は古代～中世の遺物が採集されている。

1 ～ 6 は古代の須恵器である。1 は杯蓋の口縁部で、端部は比較的しっかりと屈折する。2 は有台杯で、短い高台を持つ。3、4 は無台杯で、4 は器壁の厚いつくりである。5 は横瓶、6 は甕の体部片である。7 は手づくね成形の中世土師器皿である。8 ～ 14 は中世の珠洲焼である。8 ～ 12 は壺・甕の体部片で、外面に平行タタキメのもの（8 ～ 10）と綾杉状のもの（11・12）がある。13、14 は擂鉢である。13 は内面に 11 条一単位の卸し目が比較的密に認められる。口縁端部は中央部がやや凹む。底部外面は静止糸切り痕が残る。14 は内面には卸し目は確認できない。底部外面は静止糸切り痕が残る。15 は瓦質土器の鉢である。外面に花文スタンプが押捺される。内面にはハケメが見られる。近世以降のものであろう。

古代の土器は佐渡小泊窯跡産の 2、3 は 9 世紀代、他は器形などから 8 世紀後半頃と考えられる。中

世土師器は手づくねであることや器形から 15 世紀末～ 16 世紀初めに、珠洲焼は吉岡編年［吉岡 1994］のⅡ～Ⅲ期を中心とし、一部（11）はⅣ期に位置付けられる。



第 19 図　西吉津川遺跡出土遺物

（3）調査のまとめ

西吉津川遺跡は出土遺物から、古代～中世の集落遺跡である可能性が高い。今回の調査により、遺跡推定範囲が北西方向に拡大する形となった。特殊遺物などの出土は認められないが、下条川と信濃川の合流付近に立地する環境を考えると、流通に関係した集落跡であった可能性もあろう。

3　馬越遺跡

（1）遺跡と確認立会い調査の概要（第 18 図）

馬越遺跡は東山丘陵から北西方向に約 2km 離れた下条川左岸の沖積低地部に立地する。現況は標高約 6 ～ 7m 前後の水田である。遺跡は平成 7 年に発見、周知化され、これまでに数度の大規模な発掘調査が行われ、古墳時代中期、古代、中世の集落跡が確認されている。特に古代においては荘園・官衙関連遺跡として、古代蒲原郡青海郷の地域経営の拠点遺跡と把握される加茂市を代表する遺跡である［伊藤 2010］。

調査は、業者の工事日程に沿う形で、平成 21 年 10 月 5 日～ 11 月 9 日の間に行った。調査方法は西吉津川遺跡ほかと同様である。なお、新堀遺跡地内についても平成 21 年 10 月 5 日～ 10 月 30 日の間に調査を行ったが、遺構、遺物ともに確認できなかった。

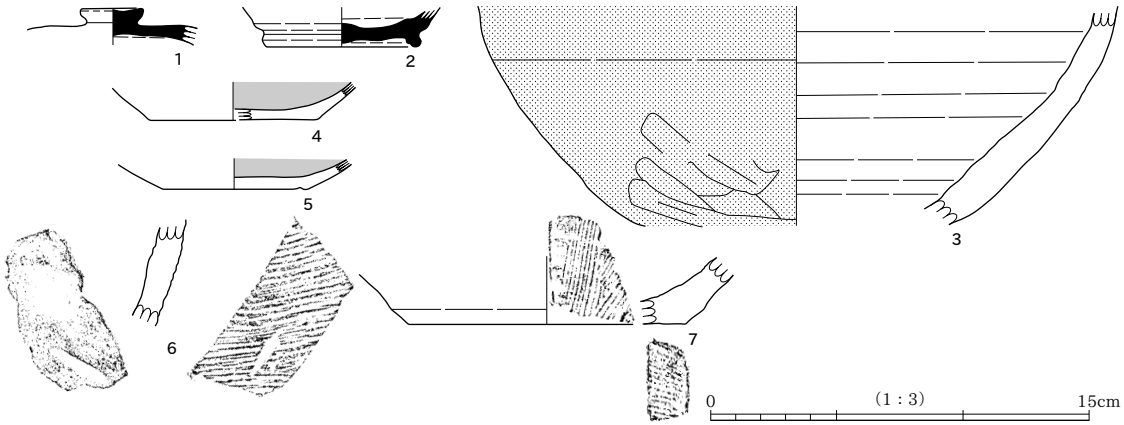
（2）遺構と遺物（第 20 図）

遺構は把握できなかったが、1 箱分の遺物を採集した。1 は須恵器杯蓋、2 は須恵器有台杯で、1 は新津丘陵窯跡産、2 は佐渡小泊窯跡産である。3 は土師器の鉢で、外面は赤彩される。4、5 は黒色土器無台椀の底部である。4 は底部外面に棒状黒斑が見られる。6 は珠洲焼甕で細かいタタキメである。7 は珠洲焼擂鉢の底部片で、内面には比較的密な卸目が、底部外面には静止糸切り痕が見られる。

古代の土器は佐渡小泊窯跡産の存在や黒色土器などからⅥ期［春日 1999］で、9 世紀後半頃と考えられる。中世の珠洲焼は吉岡編年［吉岡 1994］のⅢ期頃であろう。

（3）調査のまとめ

馬越遺跡は出土遺物から、古代を中心とし、地点により中世の遺物が確認される。既往の調査結果と矛



第 20 図　馬越遺跡出土遺物

盾しない。遺跡は広範囲に展開しており、各時代の遺物出土傾向を把握することで集落の立地した場所や地形を考える手掛かりを得ることが可能となろう。

4　荒又遺跡

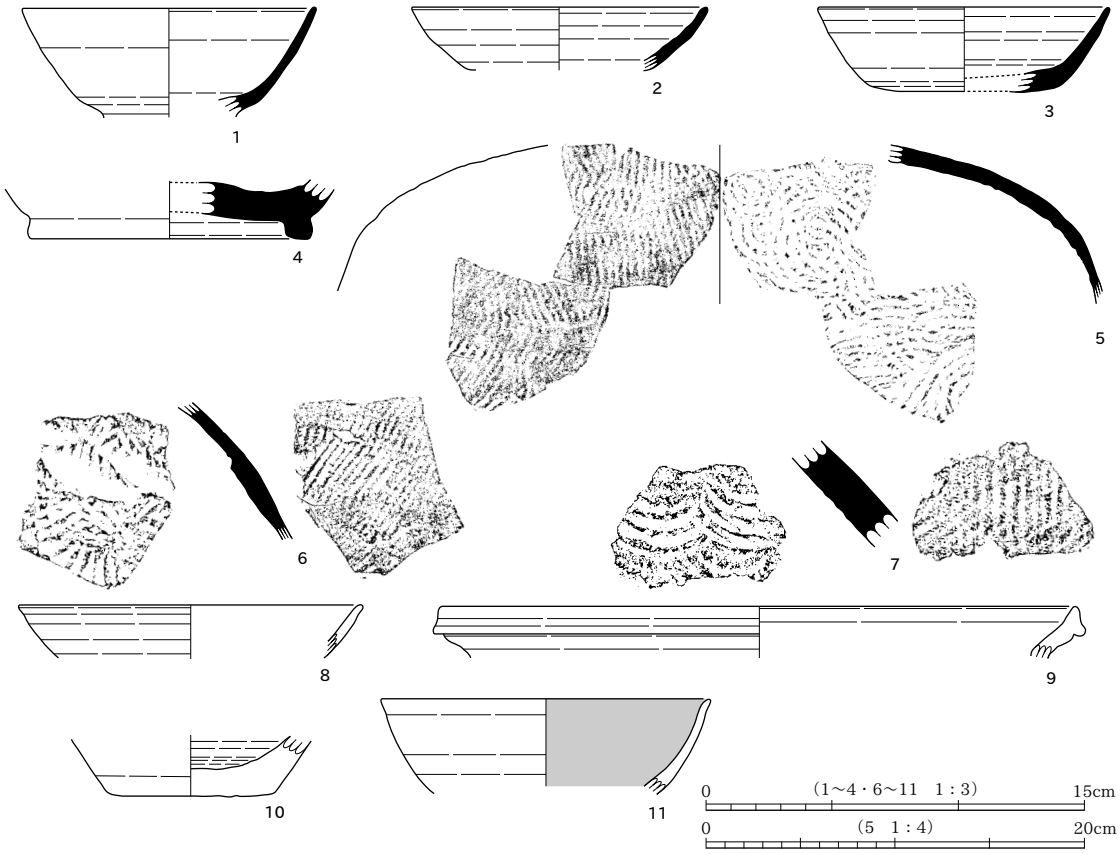
（1）遺跡と確認立会い調査の概要（第 18 図）

荒又遺跡は東山丘陵から北西方向に約 1km 離れた下条川左岸の沖積低地部に立地する。現況は標高約 6m 前後の水田で、三条市域にかけて展開する。遺跡は当初、三条市の周知遺跡である安曲遺跡周辺地として扱われ、平成 12 年と 15 年に県営ほ場整備事業吉津川地区に係わる確認調査を実施した結果、確認された。平成 19 年の本調査の結果、古墳前期と古代の集落域の一部が検出されている［伊藤 2008a］。

調査は、業者の工事日程に沿う形で、平成 21 年 10 月 5 日～ 11 月 10 日の間に行った。調査方法は西吉津川遺跡ほかと同様である。

（2）遺構と遺物（第 21 図）

遺構は把握できなかったが、1 箱分の遺物を採集した。1 は須恵器有台杯で、焼成が甘く軽量感がある。2、3 は須恵器無台杯である。2 は口縁部が大きく外反する。3 は器壁がやや厚く小振りである。1、2 は佐渡小泊窯跡産、3 は新津丘陵窯跡産と見られる。4 は須恵器長頸瓶の底部である。幅広で短い高台が付く。5 ～ 7 は須恵器甕である。4、6 は佐渡小泊窯跡産、5 は新津丘陵窯跡産、7 は阿賀北の窯跡産であろう。8 は土師器無台椀の口縁部片である。9 は土師器長甕で、口端部中央は凹みやや下方につまみ出される。



第 21 図　荒又遺跡出土遺物

10 は土師器小甕の底部。11 は黒色土器無台椀で、内湾する器形である。

古代の土器は 3 がⅣ期で 8 世紀後半、他は佐渡小泊窯跡産の須恵器を含むことや器形などから、Ⅵ期で 9 世紀後半頃が主体と考えられる。

（3）調査のまとめ

荒又遺跡では、それほど濃密ではないが、奈良・平安時代の出土遺物が確認され、既往の調査結果と矛盾しない。

5　太田遺跡

（1）遺跡と確認立会い調査の概要（第 18 図）

太田遺跡は東山丘陵から北西方向に約 1 ㎞離れた下条川左岸の沖積低地部に立地し、荒又遺跡と近接している。現況は標高約 7m 前後の水田である。太田遺跡の発見と周知化は、平成 11 年に新潟県県央歴史研究所の池野氏により、「良」墨書土器を含む古代の土器が採集されたことを契機とする。その後、平成 12 年と 15 年に県営ほ場整備事業吉津川地区に係わる確認調査と平成 19 年に本調査が行われた。密度の濃い遺構が検出され、出土遺物でも墨書土器を始め、ガラス玉や炭化米塊など特異なものが見られた［伊藤 2008a］。

調査は、業者の工事日程に沿う形で、平成 21 年 10 月 5 日～ 10 月 29 日の間に行った。調査方法は西吉津川遺跡ほかと同様である。

（2）遺構と遺物（第 22 図）

遺構は把握できなかったが、1 箱分の遺物を採集した。1 ～ 4 は須恵器有台杯である。1 は厚手のつくりで、長い高台が付く。底部外面には右回転のヘラ切り痕が見られる。2 は内傾した高台から直線的に体部が立ち上がる。3 は短い高台が付く。底部外面にはヘラ切り痕が見られ、右回転である。4 は外側に踏ん張るしっかりした高台である。底外面には右回転の糸切り痕と「－」のヘラ書きが見られる。胎土から、1 は新津丘陵窯跡産、2、3 は佐渡小泊窯跡産、4 は頸城郡の窯跡産と考えられる。5 ～ 7 は須恵器無台杯である。5 は体部が直線的に立ち上がる器形である。6、7 は底部外面に墨書が見られるが、どちらも判読できない。5 ～ 7 はすべて佐渡小泊窯跡産である。8、9 は須恵器長頸瓶である。ともに体部外面はロクロケズリされる。8 は高台外面に板状圧痕、底部外面にヘラ書きが見られる。10 ～ 12 は須恵器甕の体部片である。13 は土師器無台椀である。粗雑なつくりで、体部は内湾する。底部外面には右回転の糸切り痕が見られる。14 は土師器長甕で、口端部に面を持つ。15 は珠洲焼甕で、綾杉状のタタキメである。

古代の土器は大半が佐渡小泊窯跡産であることや器形などから V_2 期、9 世紀前半頃を中心とすると考えられる。

（3）調査のまとめ

太田遺跡では、今回の暗渠工事で多量の遺物が出土した。これは、遺跡が地形の安定した環境に立地し、遺物包含層が比較的浅いところに存在することと関係しよう。遺物の主体は平安時代のものである。少量ではあるが中世の遺物が見られることは注意する必要がある。

第 22 図　太田遺跡出土遺物

第Ⅴ章　民間開発関連

1　調査に至る経緯

平成 19 年度は宅地造成工事に関係し、1 件の試掘調査、平成 20 年度は集合住宅新築工事に関係し、2 件の確認調査を行った。

平成 19 年度は（株）エステートコンサルタントが主体となる宅地造成工事に伴う調査である。平成 19 年 8 月に事業者から、事業予定地における埋蔵文化財の有無などについて照会を受けた。予定地は周知遺跡の舞台遺跡に近接し、開発面積も約 6,570m^2 と大きいことから試掘調査をお願いする方向で協議を重ねた。その後、事業者から試掘調査の同意を得たが、早急な試掘調査終了を要望された。同時期に下条地区でほ場整備事業に伴う本調査を実施中であったが、日程を調整し、試掘調査を早期に行うこととした。市教委は、（株）エステートコンサルタントから平成 19 年 9 月 6 日付けで土地所有者の承諾書をもらい、平成 19 年 9 月 7 日付け民資第 170 号にて文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告について新潟県教育委員会教育長宛てに提出し、調査の準備に入った。

平成 20 年度の 2 件はともに（株）大東建託が仲介する集合住宅新築工事に伴うものである。平成 20 年 5 月に事業者から陣ヶ峰地内 2 地点について埋蔵文化財包蔵地の有無の照会があり、どちらも周知遺跡の範囲に含まれることから、届出と確認調査が必要と返答した。

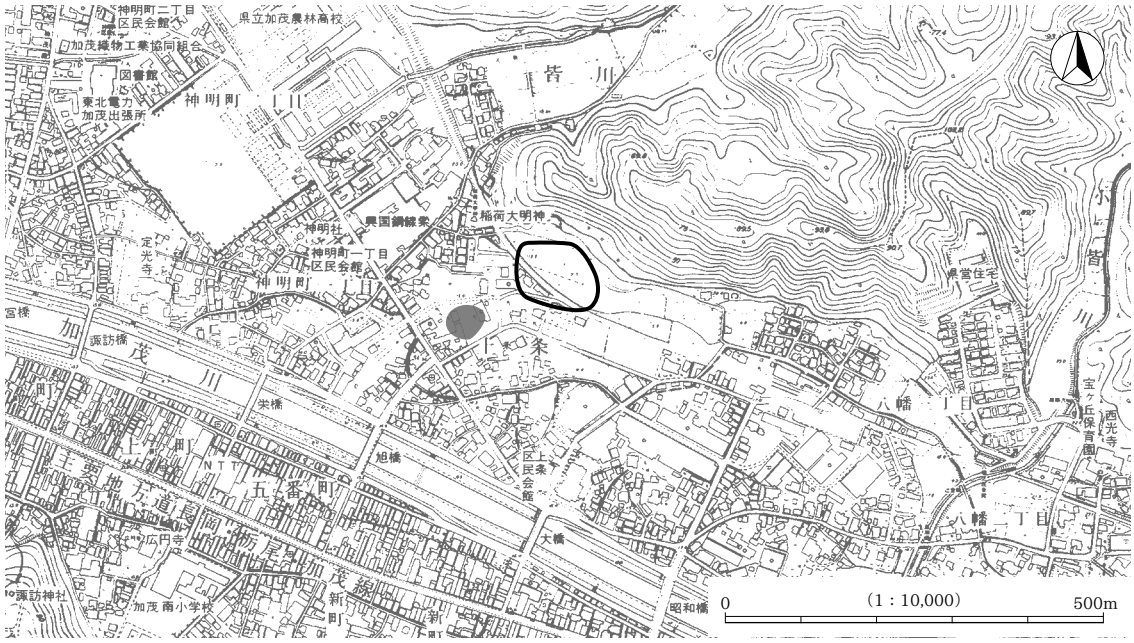
しかし、数日後に陣ヶ峰遺跡地内の工事計画地の施主から市教委に「埋蔵文化財試掘について」の文書が提出された。それによれば、計画地が軟弱であることから、試掘調査が原因により建物が沈下する可能性を憂慮し、試掘に同意できないという内容であった。市教委は県文化行政課の見解を仰ぎながら、確認調査は建築物への影響が及ばない駐車場計画部分のみを対象とし、埋め戻しは川砂を入れてしっかり行うことなどを条件に再三、事業者を通じ協議を重ねた。そして、一端は施主の同意書をもらい、平成 20 年 6 月 5 日に確認調査を行う諸準備に入ったが、調査前日に施主の意向により延期せざるを得ない形となった。さらに、施主への説明とお願いを続け、何とか了解を得ることができ、一週間後の 6 月 12 日に調査に入ることとなった。陣ヶ峰北遺跡地内においても同様の条件で説明とお願いを行い、施主から了解を得た。

文化財保護法第 93 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘の届出については、平成 20 年 5 月 1 日付けと平成 20 年 10 月 1 日付けでそれぞれ施主から、新潟県教育委員会教育長宛てに出された。市教委ではそれぞれ確認調査が必要と判断し、埋蔵文化財の発掘について平成 20 年 5 月 21 日付け民資第 126 号及び平成 20 年 10 月 7 日付け民資第 232 号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。その後、関係者と調整を行い、文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告について、平成 20 年 6 月 9 日付け民資第 142 号及び平成 20 年 10 月 8 日付け民資第 233 号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。

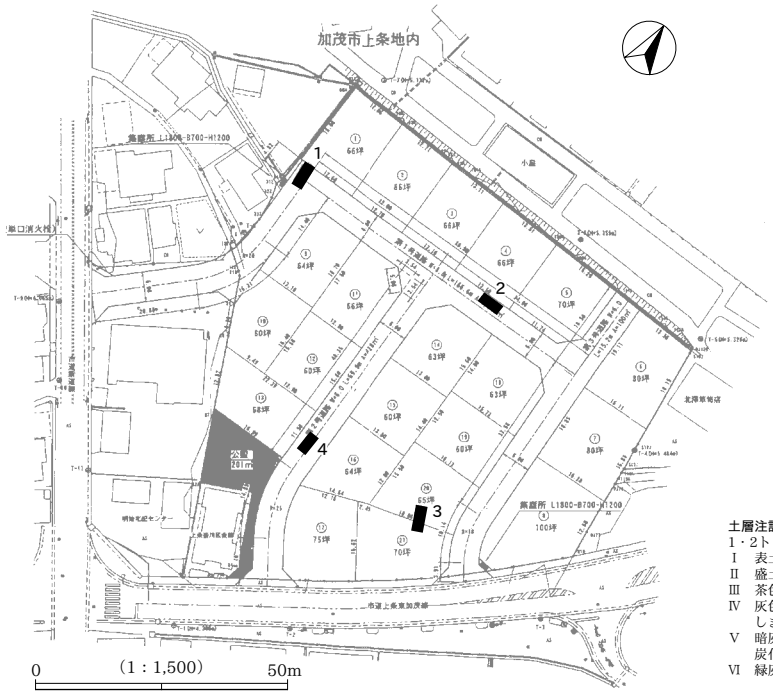
2　舞台遺跡周辺地

（1）調査対象地と試掘調査の概要（第 23・24 図）

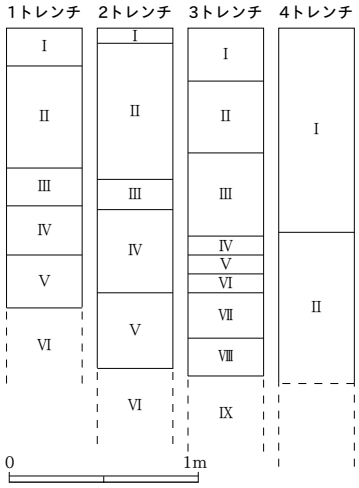
調査対象地は舞台遺跡推定範囲の西側約 50m 程の距離にある。舞台遺跡は加茂川右岸で、上条城跡が立地する丘陵眼下の沖積地に展開する中世前期の遺跡である。平成 8 年に市道建設工事に伴う発掘調査が行われ、2 条の河川跡を中心に、井戸や柱穴など集落の一部が確認されている。



第 23 図　舞台遺跡推定範囲と調査対象地位置図（S=1:10,000）
（加茂市　平成 9 年印刷〔加茂市街図〕 S=1:10,000 原図）



第 24 図　舞台遺跡周辺地試掘調査トレンチ位置図（S=1:1,500）
（（株）エステートコンサルタント提供　S=1:500 原図）



土層注記

1・2トレンチ	3トレンチ	4トレンチ
Ⅰ　表土	Ⅰ・Ⅱ　盛土	Ⅰ　盛土
Ⅱ　盛土	Ⅲ　撹乱	Ⅱ　撹乱・礫層
Ⅲ　茶色粘質土	Ⅳ　茶色土	
Ⅳ　灰色粘質土　しまりなし。	Ⅴ　暗茶色土　しまりなし。	
Ⅴ　暗灰茶色粘質土　炭化物含む。	Ⅵ　暗灰茶色土（河川跡）	
Ⅵ　緑灰色土	Ⅶ　灰色土（河川跡）	
	Ⅷ　暗茶色土（河川跡）	
	Ⅸ　茶色土（河川跡）	

第 25 図　舞台遺跡周辺地試掘調査トレンチ土層柱状図（S=1:40）

試掘調査は、平成 19 年 9 月 10 日に行われた。工事予定面積約 6,570m² のうち、概ね道路建設予定地を対象とし、約 3.0 × 4.5m のトレンチを 4 カ所設定した。遺構･遺物の検出および層序の確認を実施し、必要な計測と写真撮影後、点圧しながら埋め戻しを行った。調査面積は約 43m² である。

（2）層　序（第 25 図）

各トレンチにおいて客土（盛土）が厚く堆積し、その下位に旧水田耕作土が確認できる。4 トレンチは攪乱が著しい。調査対象地は旧来製材所の工場として利用されており、その造成時に土地の改変が行われたことが推測される。耕作土の下層には粘性土が厚く堆積する。

（3）遺構と遺物

遺構・遺物ともに確認できない。

（4）調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認されなかった。

3　陣ヶ峰遺跡

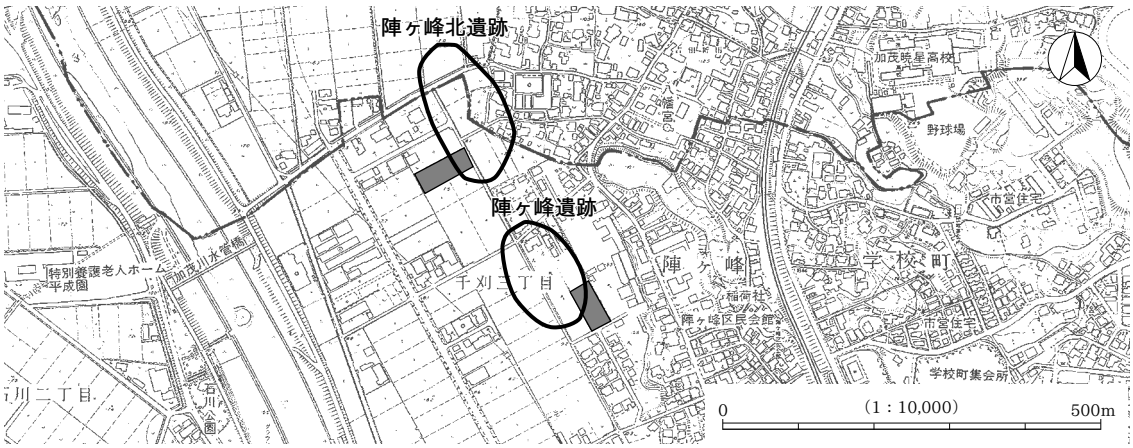
（1）調査対象地と確認調査の概要（第 26・27 図）

陣ヶ峰遺跡は平成 7 年に周知化された、加茂川右岸の沖積地に展開する古代の遺跡である。現況は標高 8m 前後の水田である。調査対象地は遺跡推定地の南東部にあたる。

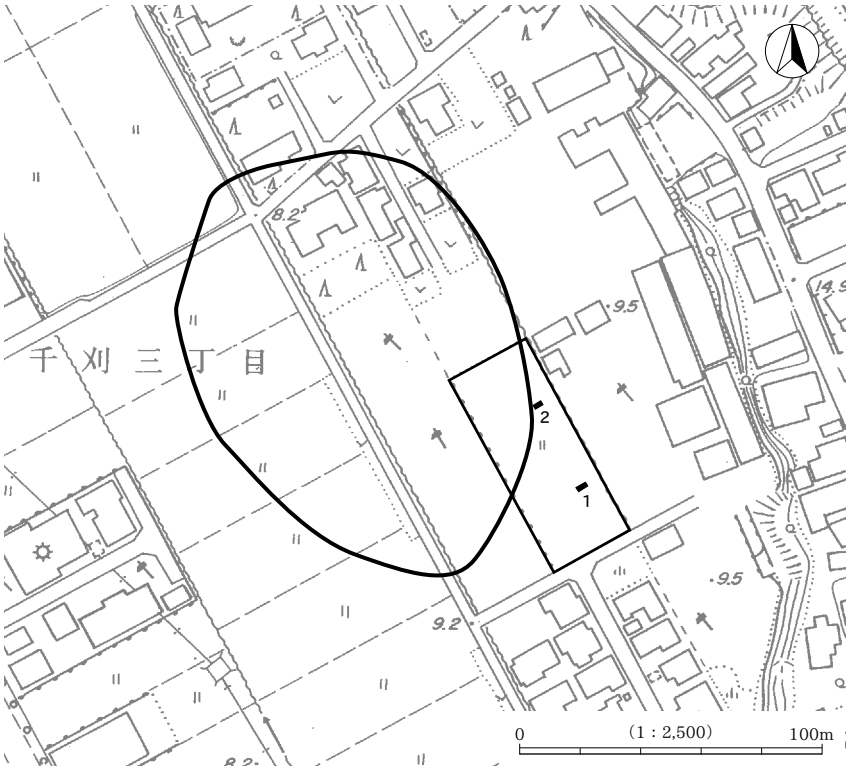
確認調査は、平成 20 年 6 月 12 日に行われた。工事予定面積約 1,940m² のうち駐車場建設予定地を対象とし、約 2.0 × 3.5m のトレンチを 2 カ所設定した。遺構・遺物の検出および層序の確認を実施し、必要な計測と写真撮影後、川砂を充填し点圧しながら埋め戻しを行った。調査面積は約 15m² である。

（2）層　序（第 28 図）

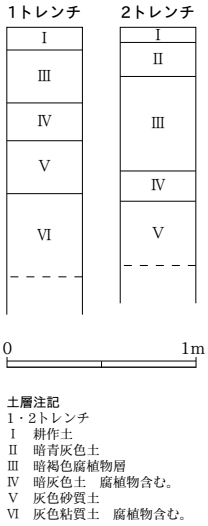
基本層序はⅠ～Ⅵ層まで確認したが、Ⅰ層耕作土より下位においては腐植物や砂質土が堆積し、河川氾濫などによる堆積環境が推測される。遺物包含層及び遺構確認面は確認されていない。



第 26 図　陣ヶ峰遺跡・陣ヶ峰北遺跡推定範囲と調査対象地位置図（S=1:10,000）
（加茂市　平成 9 年印刷 〔加茂市街図〕 S=1:10,000 原図）



第 27 図　陣ヶ峰遺跡確認調査トレンチ位置図（S=1:2,500）
（加茂市　平成 9 年印刷〔加茂市街図〕 S=1:2,500 原図）



第 28 図　陣ヶ峰遺跡確認調査トレンチ土層柱状図
（S=1:40）

（3）遺構と遺物

遺構・遺物ともに確認できない。

（4）調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺跡は確認されなかった。

4　陣ヶ峰北遺跡

（1）調査対象地と確認調査の概要（第 26・29 図）

陣ヶ峰北遺跡は平成 7 年に周知化された、加茂川右岸の沖積地～丘陵裾部に展開する縄文・古代の遺跡である。現況は標高 8m 前後の水田である。平成 8 年に携帯電話用鉄塔建設工事に伴い発掘調査が行われている。調査対象地は遺跡推定地の南西部にあたる。

確認調査は、平成 20 年 10 月 9 日に行われた。工事予定面積約 1,510m^2 のうち駐車場建設予定地を対象とし、約 2.0 × 3.5m のトレンチを 2 カ所設定した。遺構・遺物の検出および層序の確認を実施し、必要な計測と写真撮影後、川砂を充填し点圧しながら埋め戻しを行った。調査面積は約 15m^2 である。

（2）層　序（第 30 図）

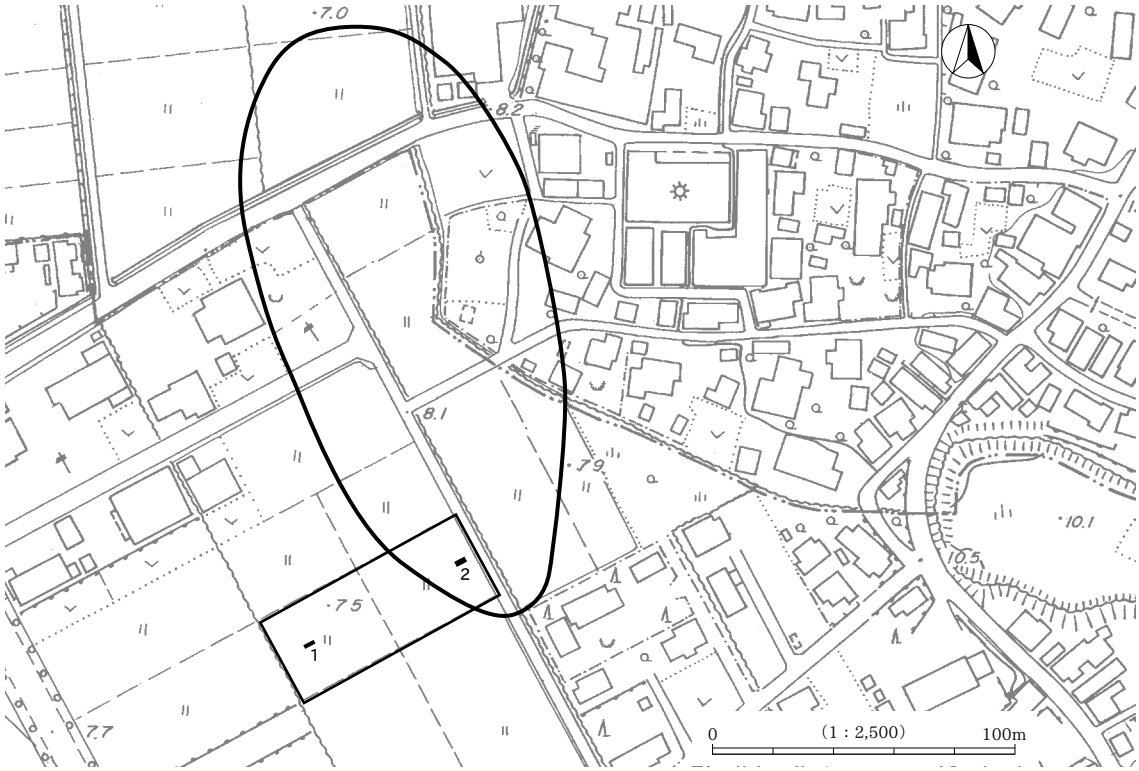
基本層序はⅠ～Ⅷ層まで確認したが、Ⅰ層耕作土より下位においては腐植物や砂質土が堆積し、河川氾濫などによる堆積環境が推測される。遺物包含層及び遺構確認面は確認されていない。

（3）遺構と遺物（第 31 図）

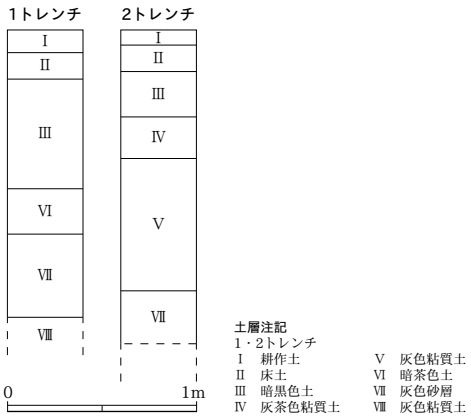
遺構は確認できなかった。遺物は１トレンチのⅦ層から１点出土した。１は古代の須恵器甕である。外面は自然釉で覆われる。内面には同心円当て具痕が見られる。新津丘陵窯跡産であろう。

（4）調査のまとめ

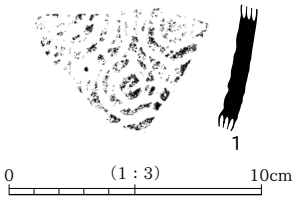
今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺構は確認されなかった。１トレンチ出土の須恵器は周辺部からの流れ込みの可能性があろう。



第 29 図　陣ヶ峰北遺跡確認調査トレンチ位置図（S=1:2,500）
（加茂市　平成９年印刷〔加茂市街図〕S=1:2,500 原図）



第 30 図　陣ヶ峰北遺跡確認調査土層柱状図（S=1:40）



第 31 図　陣ヶ峰北遺跡確認調査出土遺物

第Ⅵ章　古見道遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　はじめに

本報告は、古見道遺跡（新潟県加茂市下大谷）の確認調査で出土した柱根の年代および樹種の検討を目的として実施した自然科学分析調査結果である。本遺跡の発掘調査では、遺構確認面まで水田面（Ⅰ層）、黒褐色土（Ⅱ層）、明オリーブ灰色粘質土からなる堆積層が確認されており、Ⅲ層が遺構確認面とされている。遺構確認面からはピットや土坑が検出されており、近世磁器が出土したことから、近世初期頃の集落の一部と推定されている。

2　放射性炭素年代測定

（1）試　料

試料は、柱穴（SP1、2）内より出土した柱根であり、資料を参考とするといずれも芯持材と判断される。分析試料は、柱根より採取された木片であり、後述する樹種同定試料の採取と同時に観察を行い、同試料内の年輪外側より採取している。

（2）分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸･アルカリ･酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ^{13}C/^{12}C の測定も行うため、この値を用いて δ ^{13}C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730 ± 40年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値に基づき、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正結果は、測定誤差 σ、2 σ（σは統計的に真の値が 68%の確率で存在する範囲、2 σは真の値が 95%の確率で存在する範囲）の値を示す。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。表中の相対比（確率分布）とは、σ、2 σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

（3）結　果

柱根の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、SP1 柱根が 370 ± 30yrBP、SP2 柱根が 330 ± 30yrBP である（第 3 表）。また、これらの補正年代に基づく暦年較正結果（測定誤差 σ）は、SP1 柱根が calAD1,454-calAD1,618、SP2 柱根が calAD1,515-calAD1,635 である（第 4 表）。以上の結果を参考とすると、SP1 柱根は 15 世紀中頃～ 17 世紀前葉、SP2 柱根は 16 世紀前葉～ 17 世紀前半という暦年較正年代が推定される。

試料		樹種	補正年代 (yrBP)	δ 13C (‰)	測定年代 (yrBP)	測定機関 Code.
遺構名 / サンプル名	性状					
SP1　柱根　（芯持材）	木片	クリ	370 ± 30	-24.66 ± 0.55	370 ± 30	IAAA-90898
SP2　柱根　（芯持材）	木片	クリ	330 ± 30	-24.69 ± 0.80	350 ± 30	IAAA-90899

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用。
2）BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差 σ（測定値の 68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

第 3 表　放射性炭素年代測定結果

試料名	補正年代（暦年較正用）（yrBP）	暦年較正年代（cal）			相対比	測定機関 Code.
SP1 柱根 木片（クリ）	373 ± 30	σ	cal AD 1,454 - cal AD 1,516	cal BP 496 - 434	0.742	IAAA-90898
			cal AD 1,595 - cal AD 1,618	cal BP 355 - 332	0.258	
		2 σ	cal AD 1,446 - cal AD 1,527	cal BP 504 - 423	0.597	
			cal AD 1,555 - cal AD 1,633	cal BP 395 - 317	0.403	
SP2 柱根 木片（クリ）	325 ± 30	σ	cal AD 1,515 - cal AD 1,599	cal BP 435 - 351	0.816	IAAA-90899
			cal AD 1,617 - cal AD 1,635	cal BP 333 - 315	0.184	
		2 σ	cal AD 1,480 - cal AD 1,644	cal BP 470 - 306	1.000	

1）RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率はσは 68%、2 σは 95%である
5）相対比は、σ、2 σのそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第 4 表　暦年較正結果

3　樹種同定

（1）試　料

試料は、放射性炭素年代測定を行った柱根 2 点（SP1 柱根、SP2 柱根）である。

（2）分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）･柾目（放射断面）･板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム･クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、［島地・伊東 1982］や［Wheeler 他 1998］を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、［林 1991］や［伊東 1995・1996・1997・1998・1999］を参考にする。

（3）結　果

柱根 2 点は、いずれも落葉広葉樹のクリに同定された。以下に、解剖学的特徴等を記す。

・クリ（*Castanea crenata Sieb*. et Zucc.）　ブナ科クリ属

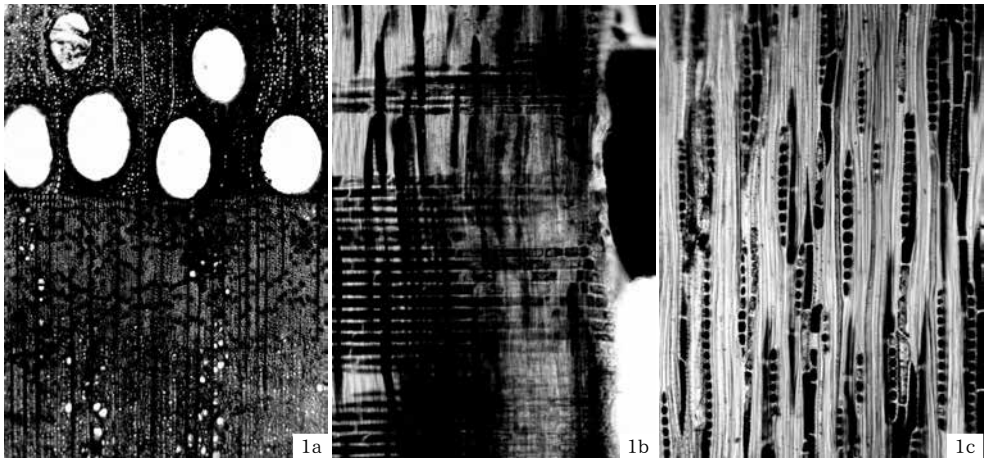
環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

（4）考　察

柱根 2 点はいずれもクリであった。クリは、重硬で強度が高く、腐りにくい材質を有することから、柱材に適した木材と言える。なお、発掘調査所見や上記した暦年較正結果から推定される時期の柱材に関する調査事例は、新潟県内では東原町遺跡（柏崎市）や大坪遺跡（阿賀野市）等が挙げられ、これらの遺跡では近世の柱材にクリが確認されている［パリノ・サーヴェイ株式会社 2005、三村 2006］。

引用文献

林　昭三　1991 『日本産木材　顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I」『木材研究・資料』31　p81-181　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 II」『木材研究・資料』32　p66-176　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 III」『木材研究・資料』33　p83-201　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV」『木材研究・資料』34　p30-166　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 V」『木材研究・資料』35　p47-216　京都大学木質科学研究所
三村昌史　2006 「大坪遺跡出土木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 153 集　一般国道 49 号安田バイパス関係発掘調査報告書 I　大坪遺跡』 p98-103　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2005 「木製品樹種同定及び鉄滓成分分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 140 集　一般国道 8 号柏崎バイパス関係発掘調査報告書 III　東原町遺跡・下沖北遺跡』 p47-54　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
島地　謙・伊東隆夫　1982 『図説木材組織』 p176　地球社
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編） 1998 『広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』 p122　伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修） 海青社 ［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］



1.クリ（SP1）
a:木口
b:柾目
c:板目

300μm:a
200μm:b,c

第 32 図　木材

第Ⅶ章　ま　と　め

本書に収録した試掘･確認調査は、平成 19 年度が 1 遺跡周辺地、2 地区、平成 20 年度が 6 遺跡、3 地区、平成 21 年度が 5 遺跡を対象としている。信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業、県営ほ場整備事業など広域で施工される工事があるため、対象とした遺跡や調査地も多くなっている。大きな事業は平成 21 年度で終息しており、今後は小規模な開発行為に伴う調査が中心となることが予想される。以下、主な調査の概要について記す。

五反田・山島新田・加茂新田・鵜森地区　信濃川左岸の五反田、鵜森地区と信濃川右岸の山島新田、加茂新田地区は文献上からの開発立村の時期は 16 ～ 17 世紀頃と見られているが、ともに調査掘削深度内においては近世以前の遺跡は確認されなかった。調査対象区域は明治 34 年測量図から見ると、新土手築造に際し、大きく削平され、池状になったところも多い。

堀割遺跡　下条川右岸の沖積地に立地した平安時代の集落跡と見られる。現地表から約 1m 下に黒色土の遺物包含層が存在する。

古見道遺跡　本遺跡は縄文時代の遺跡として周知されていたが、今回、不時発見の調査ではあったが、夥しい柱穴などの遺構が確認され、出土した 17 世紀初頭頃の肥前磁器から近世の集落跡と推測された。出土した 2 点の柱根について自然科学分析を実施し、樹種はクリで、年代測定の補正年代値も磁器の年代観と大きく矛盾しない結果が得られている。SP2 の柱根は径 30cm と太く、小字名の「ふるみどう」からも一般的な建物以外の用途が推測される。どちらにしても近世遺跡は、現集落と重複している可能性が高く、現況から様相を把握することが困難であるが、今回僅かではあるが近世遺跡の一端が把握できた意義は少なくないであろう。この遺跡は慶長～寛永の時期に営まれたと推測されるが、慶長 3 年（1598）の上杉景勝会津移封の後、七谷地域は本庄城主の村上頼勝の領地となったが、元和 4 年（1618）に堀氏分家の堀直竒領となっている［佐藤 2008］。本遺跡はその激動の時期に営まれており、地域史を形成する貴重な事例となろう。

西吉津川遺跡　出土遺物から 13 ～ 14 世紀を中心とした中世期が主体の遺跡である。他には奈良時代の土器も出土し、8 世紀後半には開発された遺跡であることが知られる。

馬越遺跡　出土した土器は、古代～中世のもので、既往の発掘調査で出土した土器と同様である。下条川左岸一帯に展開する遺跡の一端を示している。

荒又遺跡　奈良～平安時代の土器が出土した。時期は 8 世紀後半～ 9 世紀後半頃である。

太田遺跡　大型破片を含め多くの土器が出土した。現地表面から浅いところに遺物包含層が存在することを示している。僅かに中世の土器が見られるが、大半が 9 世紀前半に位置付けられる。第 22 図 4 の須恵器有台杯は器形や胎土の特徴から頸城郡の窯跡産と推測され、鬼倉遺跡、馬越遺跡と同じく、数点ではあるが土器の組成に含まれることが理解される。

舞台遺跡周辺地　中世前期が主体の舞台遺跡に隣接した区域であったが、遺跡は存在しなかった。

陣ヶ峰遺跡　今回の調査地点からは遺跡は確認されなかった。

陣ヶ峰北遺跡　古代の須恵器甕片が 1 点出土したが、遺構は確認できず、周辺部からの流入した可能性が高い。遺跡の中心は調査地点から北部に展開すると推測される。

このように本報告の個々の調査成果はささやかなものであるが、それぞれが加茂地域史にとって重要な情報であり、正確な記録と報告が求められるものと認識し、今後の調査に備えたい。

引用・参考文献

イ　伊藤秀和　1997　「加茂市における中世の遺跡について（二）ー須田地区発見の遺物の紹介ー」『加茂郷土誌』第 19 号　加茂郷土調査研究会

伊藤秀和　1999　『加茂市文化財調査報告（9）平成 10 年度加茂市内遺跡確認調査報告書ーたて屋敷遺跡　蚊口太遺跡　草生津遺跡　伝湧泉寺跡遺跡　大塚遺跡　馬越遺跡　鬼倉遺跡ー』 加茂市教育委員会

伊藤秀和　2000　『加茂市文化財調査報告（11）平成 11 年度加茂市内遺跡確認調査報告書ーたて屋敷遺跡　古見道遺跡　中沢遺跡　岩野原Ａ遺跡　馬寄遺跡周辺地　山伏塚遺跡　舞台遺跡　横土居遺跡　稲荷裏遺跡　西吉津川遺跡　天神林地内ー』 加茂市教育委員会

伊藤秀和　2001　『加茂市文化財調査報告（12）平成 12 年度加茂市内遺跡確認調査報告書ー新田川遺跡周辺地　山通遺跡　中谷地遺跡周辺地　安曲遺跡周辺地　吉津川遺跡周辺地　新堀遺跡　馬越遺跡ー』 加茂市教育委員会

伊藤秀和　2005　『加茂市文化財調査報告（15）　平成 15 年度加茂市内遺跡確認調査報告書ー西吉津川遺跡　馬越遺跡　太田遺跡　寺下遺跡　城下遺跡　伝下屋敷館跡　割沢遺跡　中沢遺跡ー』 加茂市教育委員会

伊藤秀和　2008a　「荒又遺跡・太田遺跡発掘調査速報」『加茂郷土誌』第 30 号　加茂郷土調査研究会

伊藤秀和　2008b　『加茂市文化財調査報告（17）平成 17 年度・平成 18 年度加茂市内遺跡確認調査報告書ー丸潟遺跡　五反田地区　中沢遺跡　草生津遺跡ー』 加茂市教育委員会

伊藤秀和　2010　『加茂市文化財調査報告（19）　県営吉津川地区ほ場整備事業及び送ガス管移設工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書　馬越遺跡Ⅲ』 加茂市教育委員会

オ　大橋康二　1989　『考古学ライブラリー 55　肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社

大橋康二　1994　『古伊万里の文様－初期肥前磁器を中心に－』 理工学社

小山正忠・竹原秀雄　1997　『新版標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局監修

カ　春日真実　1999　「第 4 章－第 2 節　土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 高志書院

サ　佐藤賢次　2008　「第 1 章　領主の支配　第 1 節・第 2 節」『加茂市史　資料編 2　近世』 加茂市

セ　関　正平　1984　「流れ所克服の碑　五反田の移民碑」『図解　にいがた歴史散歩＜三条・燕・加茂＞』 新潟日報事業者出版部

関　正平　1986　「加茂市」『新潟県の地名』 日本歴史地名体系第 15 巻　平凡社

タ　田中恵美子ほか　2006　『三条市文化財調査報告書第 15 号　西吉津川遺跡・白山Ｂ遺跡・府敬遺跡ー県営ほ場整備事業吉津川地区に伴う埋蔵文化財調査報告書ー』 三条市教育委員会

ノ　野上建紀　2000　「磁器の編年（色絵以外）　1．碗・小皿・皿・紅皿・紅猪口」『九州磁器の編年ー九州近世陶磁学会 10 周年記念ー』 九州近世陶磁学会

ミ　水澤幸一　2005　「越後の中世土器」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会

ヨ　吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

別　表１～９
凡　例
1　出土位置　別表２～４は遺構名、別表９はトレンチ番号を記した。他は表採などによる。
2　法　　量　土器は口径・底径・器高を示す。括弧付きの数値は遺存率が低く、推定値を含む。須恵器杯蓋の底径値はつまみ径の値である。
3　器高指数　器高 / 口径×100
4　底径指数　底径 / 口径×100
5　残 存 率　※ /36で残存割合を示した。須恵器杯蓋の底部値は、つまみの値である。
6　胎土分類　A群：阿賀北地域の窯跡群　B群：佐渡小泊窯跡群　C群：新津丘陵窯跡群　D群：西古志窯跡群　E群：頸城郡窯跡群を産地と考えられるものを示す。
7　含 有 物　土器の胎土中に含まれる鉱物等について記した。「石」は石英粒、「長」は長石粒、「砂」は砂粒、「白」は白色粒、「赤」は赤色粒、「海」は海綿骨針、「雲」は金雲母または黒雲母を表す。
8　焼　　成　観察者の主観的判断で「良好」、「並」、「不良」に分類した。
9　色　　調　『新版標準土色帖』［小山・竹原 1997］の記号を記した。
10　手　　法　特長的な手法のみ記した。底部の「糸切り」、「ヘラ切り」は回転台を用いたものである。回転方向は回転台の回転方向を示す。主に底部調整から判断した。
11　備　　考　主に墨書やヘラ書きなどの文字情報、煤などの付着物を記した。

別表１　堀割遺跡　土器観察表

図No.	報告番号	出土位置	種別	器種	法量（cm）			器高指数	底径指数	残存率		胎土		焼成	色調		手法			回転方向	備考
					口径	底径	器高			口縁	底部	分類	含有物		外面	内面	外面	内面	底部		
12	1		須恵器	甕								C群	石・長	並	10Y5/1　灰	7.5Y5/1　灰	平行タタキ	同心円当て具			
12	2		土師器	小甕		7.0					7/36		石・砂・赤	並	10YR7/4　にぶい黄橙	7.5YR7/4　にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		

別表２　古見道遺跡　磁器観察表

図No.	報告番号	出土位置	種別	器種	産地	法量（cm）			残存率		釉調	胎土		焼成	色調		文様等		備考
						口径	底径	器高	口縁	底部		色調	含有物		外面	内面	外面	内面	
17	1	SP3	近世磁器	筒形碗	肥前	9.6	5.5	7.3	5/36	7/36	透明釉	灰白色		並	2.5GY7/1　明オリーブ灰	2.5GY7/1　明オリーブ灰	唐草文　山水文		初期伊万里　高台畳付砂付着

別表３　古見道遺跡　石器観察表

図No.	報告番号	出土位置	種別	器種	法量（cm）			重量（g）	石材	色調	備考
					長さ	幅	厚み				
17	2	SP4	石製品	砥石	10.9	7.0	4.8	397.74	凝灰岩	N8/　灰白	擦痕・砥面４面

別表４　古見道遺跡　木製品観察表

図No.	報告番号	出土位置	種別	器種	法量（cm）			木取	樹種	備考
					長さ	径	厚み			
17	3	SP 1	木製品	柱根	54.9	17.8		芯持丸木	クリ	年代測定
17	4	SP 2	木製品	柱根	49.5	31.2		芯持丸木	クリ	年代測定

別表５　西吉津川遺跡　土器観察表

図No.	報告番号	出土位置	種別	器種	法量（cm）			器高指数	底径指数	残存率		胎土		焼成	色調		手法			回転方向	備考
					口径	底径	器高			口縁	底部	分類	含有物		外面	内面	外面	内面	底部		
19	1		須恵器	杯蓋	15.6					2/36		C群	石・長	並	7.5Y6/1　灰	5Y6/1　灰	ロクロナデ	ロクロナデ			外面降灰
19	2		須恵器	有台杯		6.2					12/36	B群	石・長	並	N4/　灰	N5/　灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		
19	3		須恵器	無台杯	13.4					2/36		B群	石・長	並	10YR7/2　にぶい黄橙	5YR6/2　灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ			
19	4		須恵器	無台杯		8.5					18/36	C群	石・長	並	N6/ 灰	5G5/1　緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	
19	5		須恵器	横瓶								C群	石・長	並	10YR6/1　灰	5Y6/2　灰オリーブ	平行タタキ、カキメ	同心円当て具			
19	6		須恵器	甕								B群	石・長	並	7.5Y5/1　灰	5Y6/1　灰	平行タタキ	同心円当て具			
19	7		中世土師器	皿	15.4					2/36			石・砂	並	2.5Y5/2　暗灰黄	2.5Y4/1　黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ			京都系、内面煤
19	8		珠洲焼	甕									石・長	並	N5/　灰	N6/　灰	平行タタキ（3cmで14条）	当て具			
19	9		珠洲焼	甕									石・長	並	7.5Y4/1　灰	N6/　灰	平行タタキ（3cmで12条）	当て具			
19	10		珠洲焼	甕									石・長	並	7.5Y4/1　灰	N5/　灰	平行タタキ（3cmで14条）	当て具			
19	11		珠洲焼	甕									石・長	並	N5/　灰	N6/　灰	綾杉状タタキ（3cmで8条）	当て具			
19	12		珠洲焼	甕									石・長	並	5Y6/1　灰	2.5Y6/1　黄灰	綾杉状タタキ（3cmで11条）	当て具			
19	13		珠洲焼	擂鉢	35.2	12.0	(12.5)			3/36	19/36		石・長	並	7.5Y6/1　灰	5Y6/2　灰オリーブ	ロクロナデ	卸目（11条単位）	静止糸切り		
19	14		珠洲焼	擂鉢		10.8					11/36		石・長	並	2.5Y6/2　灰黄	2.5Y6/1　黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切り		
19	15		瓦質土器	鉢									石・長	並	5Y5/1　灰	10YR6/4　明黄褐	花文スタンプ	ハケメ			

別表 6　馬越遺跡　土器観察表

図No.	報告番号	出土位置	種別	器種	法量（cm）			器高指数	底径指数	残存率		胎土		焼成	色調		手法			回転方向	備考
					口径	底径	器高			口縁	底部	分類	含有物		外面	内面	外面	内面	底部		
20	1		須恵器	杯蓋		2.4					25/36	C群	石・長	並	N6/ 灰	N6/ 灰	ロクロケズリ	ロクロナデ		右	
20	2		須恵器	有台杯		6.0					6/36	B群	石・白	並	7.5Y6/1 灰	10Y5/1 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	
20	3		土師器	鉢									石・砂・海・雲	並	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ			外面赤彩
20	4		黒色土器	無台椀		6.6					11/36		石・海・雲	並	10YR5/3 にぶい黄橙	N3/ 暗灰	ロクロケズリ	黒色処理、ロクロナデ	ロクロケズリ		底外面棒状黒斑
20	5		黒色土器	無台椀		5.6					10/36		石・海	並	2.5Y6/2 灰黄	N3/ 暗灰	ロクロケズリ	黒色処理、ロクロナデ	ロクロケズリ	右	
20	6		珠洲焼	甕									石・長	並	7.5Y4/1 灰	10Y4/1 灰	平行タタキ（3cm で 13 条）	当て具			
20	7		珠洲焼	擂鉢		11.0					3/36		石・長	並	N3/ 暗灰	10Y3/1 オリーブ黒	ロクロナデ	卸目（9 条単位）	静止糸切り		外面煤

別表 7　荒又遺跡　土器観察表

図No.	報告番号	出土位置	種別	器種	法量（cm）			器高指数	底径指数	残存率		胎土		焼成	色調		手法			回転方向	備考
					口径	底径	器高			口縁	底部	分類	含有物		外面	内面	外面	内面	底部		
21	1		須恵器	有台杯	11.6					4/36		B群	石・白	並	2.5Y6/2 灰黄	10YR6/2 灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ			
21	2		須恵器	無台杯	11.6					6/36		B群	石・白	並	N5/ 灰	N5/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ			内外面黒色噴出物
21	3		須恵器	無台杯	11.5	7.5	3.4	30	65	3/36	7/36	C群	石・長	並	2.5Y6/2 灰黄	5Y6/1 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		
21	4		須恵器	長頸瓶		11.0					5/36	B群	石・長	並	10Y7/1 灰白	N 7/ 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			
21	5		須恵器	甕								C群	石・長	並	10Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	平行タタキ	同心円当て具			
21	6		須恵器	甕								B群	石・長	並	N5/ 灰	N6/ 灰	格子タタキ	放射状当て具			
21	7		須恵器	甕								A群	石・長	並	N6/ 灰	7.5Y5/1 灰	平行タタキ	同心円当て具			
21	8		土師器	無台椀	13.5					4/36			石・砂	並	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
21	9		土師器	長甕	25.2					3/36			石・砂	並	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
21	10		土師器	小甕		6.5					16/36		石・砂	並	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	
21	11		黒色土器	無台椀	13.0					2/36			石・海	並	2.5Y7/3 浅黄	N3/ 暗灰	ロクロナデ	黒色処理、ロクロナデ			

別表 8　太田遺跡　土器観察表

図No.	報告番号	出土位置	種別	器種	法量（cm）			器高指数	底径指数	残存率		胎土		焼成	色調		手法			回転方向	備考
					口径	底径	器高			口縁	底部	分類	含有物		外面	内面	外面	内面	底部		
22	1		須恵器	有台杯		8.6					26/36	C群	石・長	並	7.5Y6/1 灰	N6/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	
22	2		須恵器	有台杯	11.6	7.0	4.9	42	60	2/36	7/36	B群	石・白	並	10Y5/1 灰	N5/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		
22	3		須恵器	有台杯		9.4					17/36	B群	石・長	並	10Y7/1 灰白	N6/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	
22	4		須恵器	有台杯		7.0					34/36	E群	石・長	並	10Y7/1 灰白	10Y7/2 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	底外「－」ヘラ書き
22	5		須恵器	無台杯								B群	石・白	並	N6/ 灰	7.5Y6/1 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		
22	6		須恵器	無台杯		6.6					11/36	B群	石・白	並	N5/ 灰	N5/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		底外面墨書「□」
22	7		須恵器	無台杯		7.0					5/36	B群	石・白	並	N 4/ 灰	N 4/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		底外面墨書「□」
22	8		須恵器	長頸瓶		13.6					11/36	B群	石・長	並	N 4/ 灰	10Y6/1 灰	ロクロケズリ	ロクロナデ	ロクロケズリ	右	高台外板状圧痕、底外ヘラ書き、底内自然釉
22	9		須恵器	長頸瓶		10.0					10/36	B群	石・長	並	N5/ 灰	7.5Y5/1 灰	ロクロケズリ	ロクロナデ	ロクロケズリ		外面煤、底内自然釉
22	10		須恵器	甕								C群	石・長	並	10Y5/1 灰	N6/ 灰	平行タタキ	平行当て具			
22	11		須恵器	甕								C群	石・長	並	7.5Y5/1 灰	10Y5/1 灰	平行タタキ	同心円当て具			
22	12		須恵器	甕								B群	石・長	並	5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	格子タタキ	平行当て具			
22	13		土師器	無台椀	12.5	5.8	4.2	34	46	1/36	25/36		石・砂・赤	並	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	
22	14		土師器	長甕	22.3					3/36			石・砂	並	2.5Y6/2 灰黄	10YR7/3 にぶい黄橙	カキメ	ロクロナデ			外面煤
22	15		珠洲焼	甕									石・長	並	10Y6/1 灰	7.5Y5/1 灰	綾杉状タタキメ	当て具			

別表 9　陣ヶ峰北遺跡　土器観察表

図No.	報告番号	出土位置	種別	器種	法量（cm）			器高指数	底径指数	残存率		胎土		焼成	色調		手法			回転方向	備考
					口径	底径	器高			口縁	底部	分類	含有物		外面	内面	外面	内面	底部		
31	1	1トレンチ	須恵器	甕								C群	石・長	並	5Y8/2 灰白	N6/ 灰		同心円当て具			外面自然釉

写 真 図 版

五反田　山島新田　加茂新田　鵜森地区周辺の空中写真

五反田地区　調査地近景（東から）

五反田地区　３トレンチ調査風景（西から）

五反田地区　１トレンチ土層断面（南から）

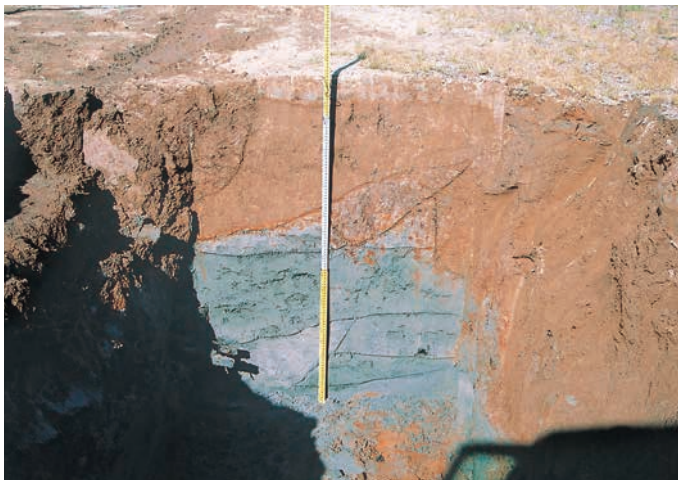
五反田地区　３トレンチ土層断面（南から）

山島新田地区　11 ～ 15 トレンチ周辺近景（西から）

加茂新田地区　21 ～ 23 トレンチ周辺近景（東から）

加茂新田地区　22 トレンチ調査風景（北から）

加茂新田地区　32 トレンチ調査風景（北東から）



山島新田地区　12 トレンチ土層断面（西から）

山島新田地区　18 トレンチ土層断面（南から）

山島新田地区　19 トレンチ土層断面（南から）

加茂新田地区　22 トレンチ土層断面（南から）

加茂新田地区　24 トレンチ土層断面（東から）

加茂新田地区　25 トレンチ土層断面（西から）

加茂新田地区　26 トレンチ土層断面（西から）

加茂新田地区　27 トレンチ土層断面（東から）

鵜森地区　1～3 トレンチ周辺近景（北から）

鵜森地区　7 トレンチ調査風景（北東から）

鵜森地区　5 トレンチ土層断面（北東から）

鵜森地区　7 トレンチ土層断面（南西から）

堀割遺跡　調査地近景（東から）

堀割遺跡　調査地近景（南東から）

堀割遺跡　土層断面（北東から）

堀割遺跡　出土遺物

古見道遺跡　遠景（南西から）

古見道遺跡　調査風景（北西から）

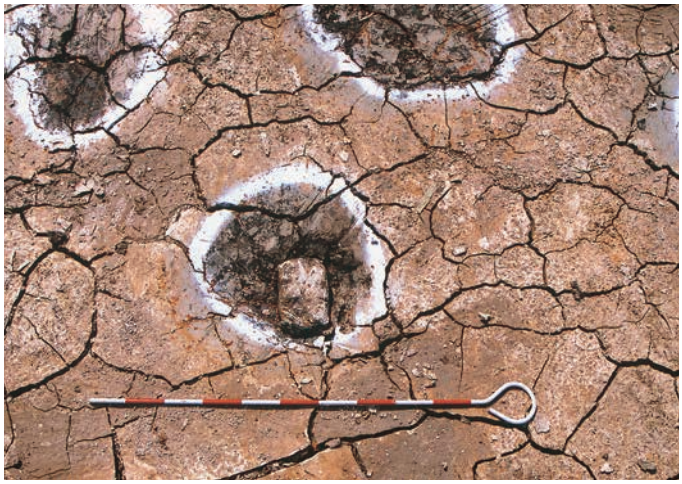
古見道遺跡　全景（北西から）

古見道遺跡　全景（南東から）

古見道遺跡　基本土層断面（北から）

古見道遺跡　SP 1 確認状況（北から）

古見道遺跡　SP 2 確認状況（北から）



古見道遺跡　SP 4 砥石出土状況（東から）

古見道遺跡　出土遺物

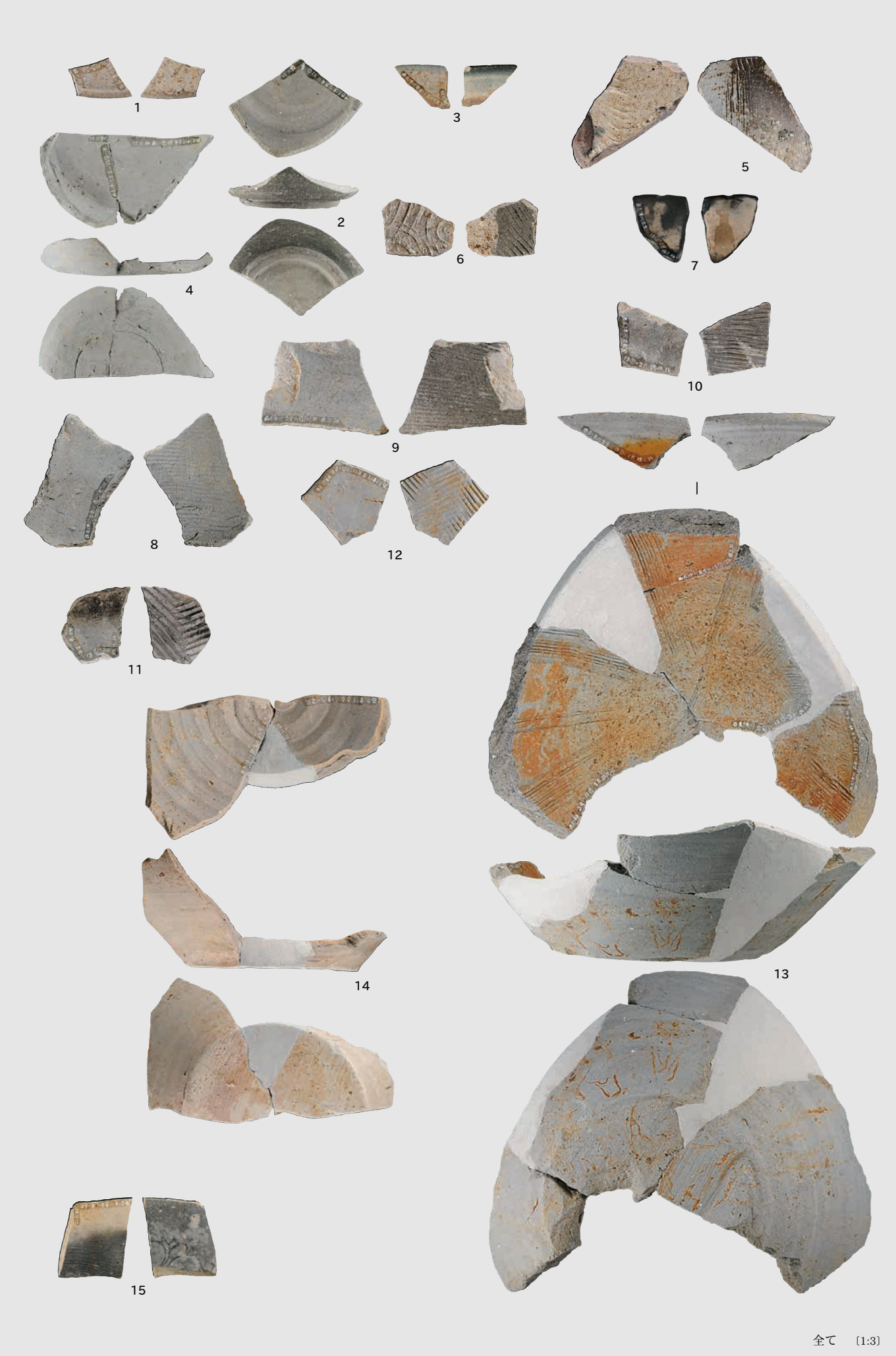
西吉津川遺跡　馬越遺跡　荒又遺跡　太田遺跡周辺の空中写真

西吉津川遺跡　調査風景（南から）

西吉津川遺跡　調査風景（南西から）

西吉津川遺跡　調査風景（東から）

西吉津川遺跡　遺構確認状況（南東から）



全て　〔1:3〕

西吉津川遺跡　出土遺物

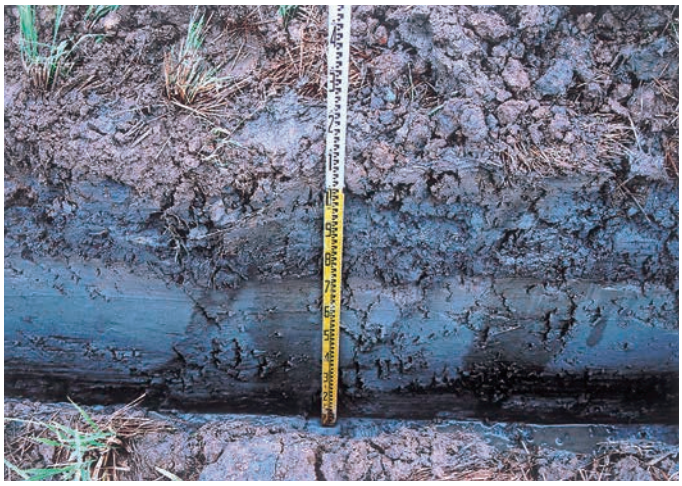
馬越遺跡　調査風景（北から）

馬越遺跡　調査風景（北から）

馬越遺跡　調査風景（西から）

馬越遺跡　調査風景（東から）

馬越遺跡　土層断面（東から）



馬越遺跡　土層断面（西から）

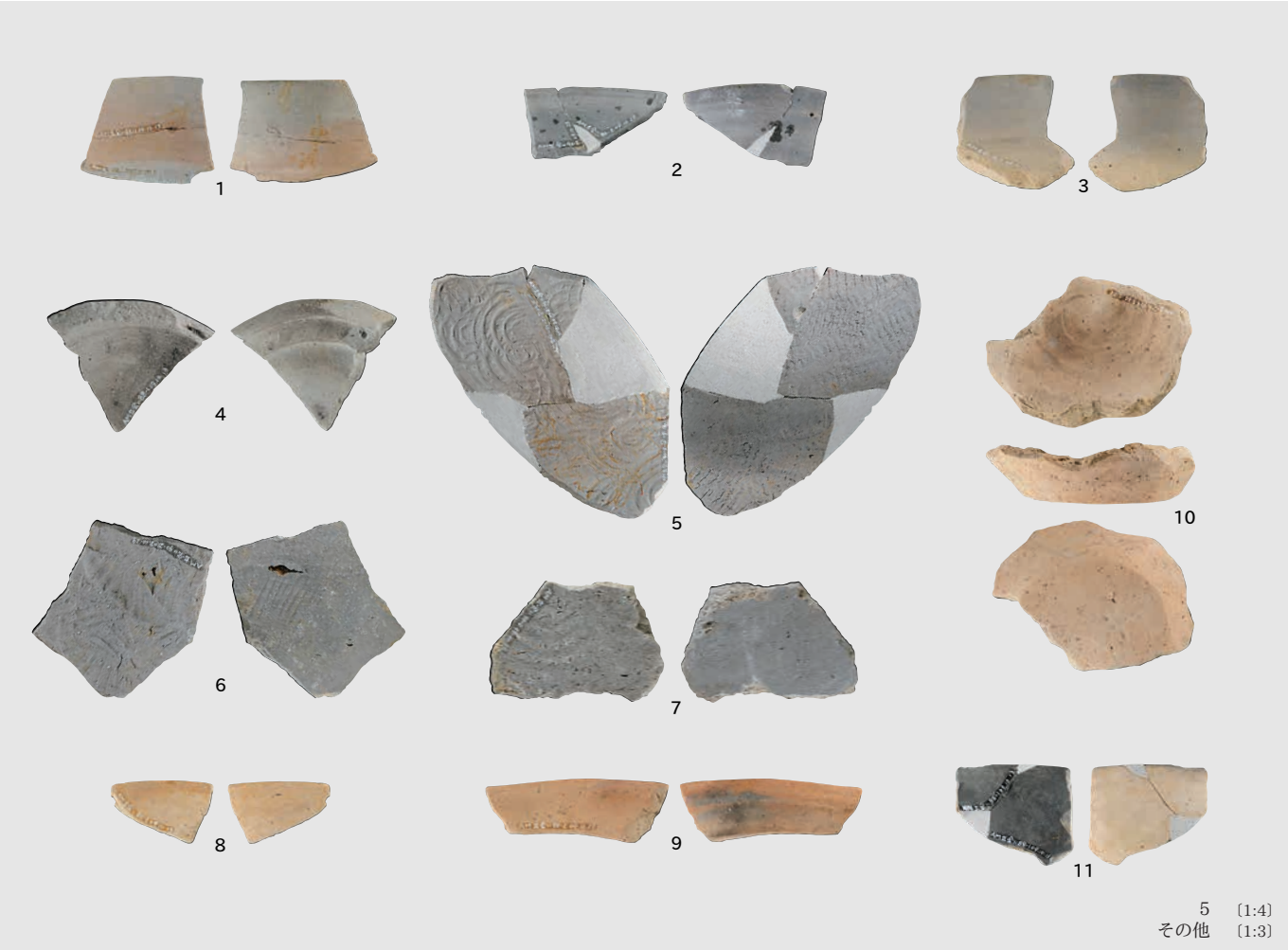
馬越遺跡　出土遺物

荒又遺跡　調査風景（南西から）

荒又遺跡　調査風景（南東から）

荒又遺跡　土層断面（南から）

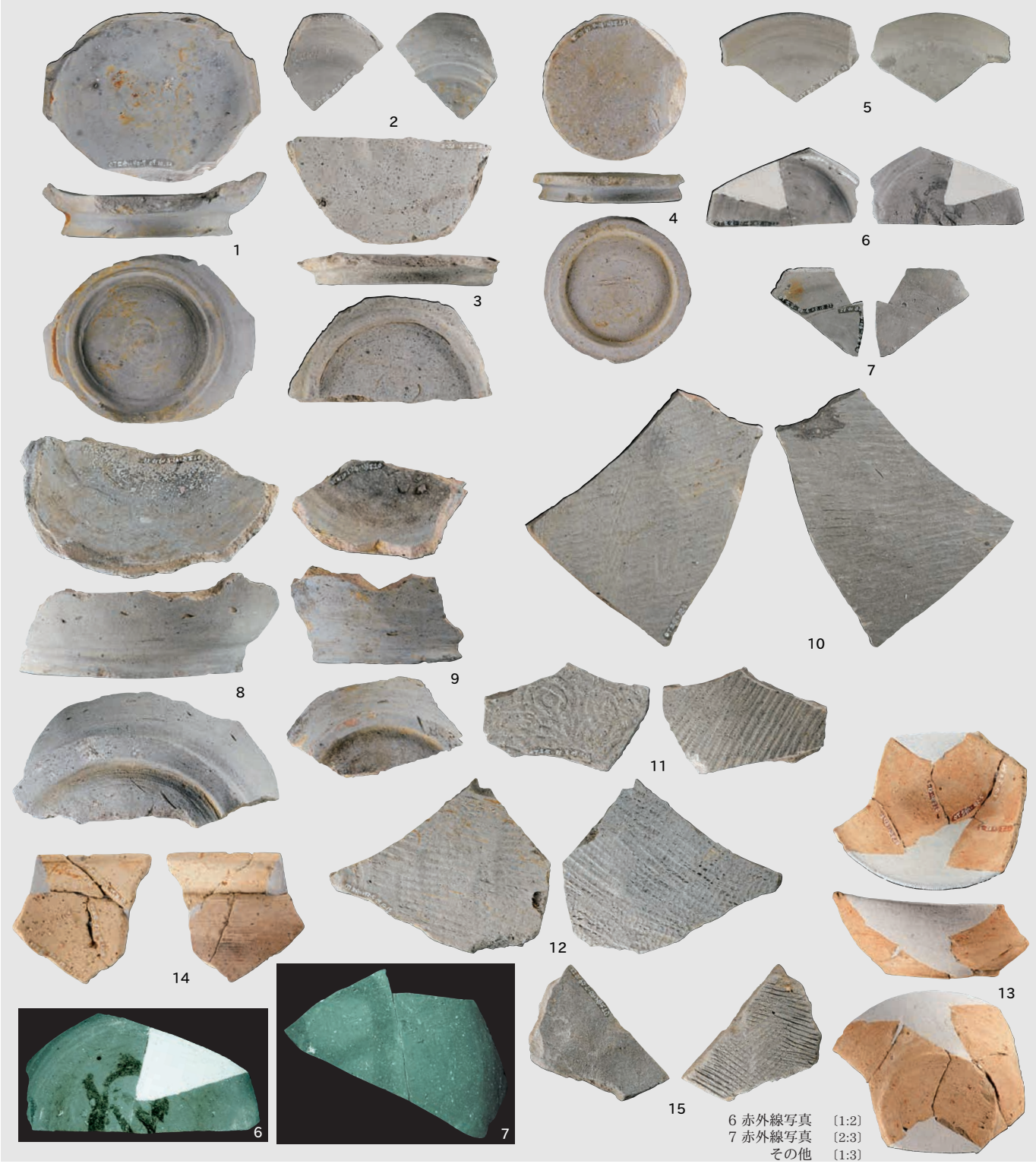
荒又遺跡　土層断面（南東から）



荒又遺跡　出土遺物

太田遺跡　調査風景（北から）

太田遺跡　調査風景（東から）



6 赤外線写真　〔1:2〕
7 赤外線写真　〔2:3〕
その他　〔1:3〕

太田遺跡　出土遺物

舞台遺跡周辺地　調査地近景（南から）

舞台遺跡周辺地　２トレンチ調査風景（東から）

舞台遺跡周辺地　１トレンチ土層断面（北から）

舞台遺跡周辺地　３トレンチ土層断面（北から）

陣ヶ峰遺跡　陣ヶ峰北遺跡周辺の空中写真

陣ヶ峰遺跡　調査地近景（北西から）

陣ヶ峰遺跡　１トレンチ調査風景（北から）

陣ヶ峰遺跡　１トレンチ土層断面（西から）

陣ヶ峰遺跡　２トレンチ土層断面（西から）

陣ヶ峰北遺跡　調査地近景（北から）

陣ヶ峰北遺跡　１トレンチ調査風景（南から）

陣ヶ峰北遺跡　１トレンチ土層断面（東から）

陣ヶ峰北遺跡　出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	かもしないいせきかくにんちょうさほうこくしょ
書名	平成 19 年度　平成 20 年度　平成 21 年度　加茂市内遺跡確認調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	加茂市文化財調査報告（20）
編著者名	伊藤秀和
編集機関	加茂市教育委員会　社会教育課
所在地	〒 959 － 1392　新潟県加茂市幸町 2 丁目 3 番 5 号　TEL（0256）52 － 0080
発行年月日	西暦　2010 年 11 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
五反田地区	加茂市大字五反田	15209		37 度 31 分 16 秒	139 度 01 分 13 秒	20071003	64	信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業
山島新田地区	加茂市大字山島新田	15209		37 度 40 分 55 秒	139 度 00 分 14 秒	20070614 20080228 20080513 ～ 20080515 20081106 ～ 20081107	289.3	信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業
加茂新田地区	加茂市大字加茂新田	15209		37 度 40 分 58 秒	139 度 00 分 48 秒			信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業
鵜森地区	加茂市大字鵜森	15209		37 度 41 分 02 秒	138 度 59 分 43 秒	20090129 ～ 20090130	53	信濃川下流河川災害復旧等関連緊急事業
堀割遺跡	加茂市大字天神 林 字宮ノ浦 349 ほか	15209	113	37 度 40 分 08 秒	139 度 00 分 54 秒	20090313 ～ 20090319		農業基盤整備事業
古見道遺跡	加茂市大字下大谷字中田 228-1	15209	156	37 度 36 分 53 秒	139 度 06 分 49 秒	20090430	150	農業基盤整備事業
西吉津川遺跡	加茂市大字天 神 林字西吉津川 1066 ほか	15209	118	37 度 39 分 41 秒	139 度 00 分 43 秒	20081004 ～ 20081126		県営ほ場整備事業吉津川地区
馬越遺跡	加茂市大字下 条 字馬越甲 1763 ほか	15209	117	37 度 39 分 28 秒	139 度 01 分 17 秒	20091005 ～ 20091109		県営ほ場整備事業吉津川地区
荒又遺跡	加茂市大字下 条 字荒又甲 1106 ほか	15209	171	37 度 39 分 03 秒	139 度 01 分 33 秒	20091005 ～ 20091110		県営ほ場整備事業吉津川地区
太田遺跡	加茂市大字下 条 字太田 1078 ほか	15209	163	37 度 39 分 03 秒	139 度 01 分 48 秒	20091005 ～ 20091029		県営ほ場整備事業吉津川地区
舞台遺跡 周 辺地	加茂市大字 上 条 699-1 ほか	15209		37 度 39 分 34 秒	139 度 03 分 46 秒	20070910	43	宅地造成工事
陣ヶ峰遺跡	加茂市大字陣ヶ峰 194-1 ほか	15209	147	37 度 40 分 12 秒	139 度 03 分 06 秒	20080612	15	集合住宅新築工事
陣ヶ峰北遺跡	加茂市大字千刈三 丁 目 147-2 ほか	15209	137	37 度 40 分 16 秒	139 度 03 分 00 秒	20081009	15	集合住宅新築工事

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五反田地区					
山島新田地区					
加茂新田地区					
鵜森地区					
堀割遺跡	遺物包含地	古代		土師器、須恵器	
古見道遺跡	集落跡	近世	土坑、ピット	肥前磁器、砥石、柱根	
西吉津川遺跡	遺物包含地	古代・中世		土師器、須恵器、珠洲焼	
馬越遺跡	集落跡	古代・中世		土師器、須恵器、珠洲焼	
荒又遺跡	集落跡	古代・中世		土師器、須恵器	
太田遺跡	集落跡	古代・中世		土師器、須恵器、珠洲焼	
舞台遺跡周辺地					
陣ヶ峰遺跡					
陣ヶ峰北遺跡	遺物包含地	古代		須恵器	

加茂市文化財調査報告（20）

平成 19 年度　平成 20 年度　平成 21 年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

五反田地区　山島新田地区　加茂新田地区　鵜森地区　堀割遺跡　古見道遺跡　西吉津川遺跡
馬越遺跡　荒又遺跡　太田遺跡　舞台遺跡周辺地　陣ヶ峰遺跡　陣ヶ峰北遺跡

印刷月日　平成 22 年 11 月 25 日
発行月日　平成 22 年 11 月 30 日
発行・編集者　加茂市教育委員会
〒 959-1392　新潟県加茂市幸町 2 丁目 3 番 5 号
TEL　0256（52）0080
印刷所　有限会社　いとう印刷
〒 959-1378　新潟県加茂市駅前 4 番 4 号
TEL　0256（52）0696